

ヤマトコロニーの成立と展開 (続)

—— カリフォルニアにおける日系移民コミュニティ ——

ケ サ ・ ノ ダ 著

黒 澤 恵 美 子 訳

内 田 實 編

—— 目 次 ——

解 題	
序 文	
I 創設者の夢 1865—1903	
II 夢の実現 1904—1906	
III 開拓：風の強い砂漠での植栽 1906—1910	
IV コロニーの確立 1910—1914	
V 移民花嫁 1915—1919	
VI 繁 栄 1915—1919 (前号)	
VII 経 済 不 況 1920—1929	
VIII 2世の時代 1930—1941	
IX 拒まれた収穫 1941年12月—1942年9月	
X 分散と帰郷 1942年9月—1945年12月	
XI コミュニティの再建 1946—1960	
編者あとがき	

VII 経 済 不 況 1920—1929

1919年はコロニーの人々にとって最後の穏やかな年であった。1920年から1929年にかけてはコロニー内部でも、また町との関係においても様々な出来事に直面することになった。直接過去に種が蒔かれた2つの動向は続いたのではあるが、同時にアメリカへの対応を迫られることになった。

1920年代はカリフォルニア州のみでなく、アメリカの国内においても、反日運動と日本人を規制する法律が拡大していった10年間であった。カリフォルニアではさらに2つの外国人土地法が当初の法律の欠点を埋めるために通過した。⁽¹⁾ 日本では写真結婚のためのパスポートの発行をやめ、合衆国最高裁判所は日本人を“市民権に不適格な外国人”とする判断を認めた。そして1924年に排日移民法案によって日本人移民が禁止された。

リビングストンでは日本人に対する敵対心は1922年末までおさまらなかつた。肉体的暴力はなかつたものの、近くのトゥロックや、町から6マイル離れた農場ではいくつか事件があった。⁽²⁾ 日本人に対する不安の記事が新聞に現われ、日本人への土地販売禁止のキャンペーンがその力を結集させることになった。

リビングストンの土地ボイコット運動は、郡全体のキャンペーンの一齣にすぎない。1920年1月、リビングストンクロニクルの編集者である E.G. アダムスは日本人の土地購入を禁止するために単独で形成された組織のメルセド郡反日協会の議長として選出され、彼は社説で次のように論じた。

“メルセド市民の数百人の決心に従えば、売る土地はあるかも知れないが、この郡の最後の

土地の一角が日本人の手に渡ることはないであろう。郡の主な団体の 20 名以上の代表者によって率直に述べられた自分の心構の表現を聞けば、この郡の住民の誰も日本人との土地売買との関係にこれっぽっちも参加しないであろう。なぜならその様な人がいたら、自分がいつまでもきらわれものになるということを知っているからである。”(Livingston Chronicle 1920 年 1 月 16 日号)

“上流階級の日本人”といえども例外とはされなかった。

1 週間たたないうちに“NO MORE JAPANESE WANTED HERE”と書かれた看板がリビングストンへ入る高速道路の入口の両側に立った。新聞によると、これらはリビングストンの実業家や農場主が召集された会議の後で立てられたという。看板を立てるという動議は満場一致で可決されたと云われ、地方農業センターと取引委員会がその費用を負担することになった。1 週間後にそれらに反対する会議もあったが、町のホールで大きな会議が開かれたとき、看板を壁にはるという決定が再びなされている。3, 4 名が棄権したと報告されたが議案に反対するものはいなかった。

反日の看板がリビングストンに掲げられ、活発なボイコットキャンペーンが数カ月間続いた。誓約書が配布され、日本人への土地の販売や借地契約に反対する署名をした人々を縛りつけた。署名をしない人々を訪れるための委員会が作られた。2 月になるとアダムズは土地所有者は急遽署名をしていると報告をした。

しかし事態は急速に結論へと動いた。その年の 5 月、取引委員会が満場一致で看板を外すことを可決した。一般に知られている理由として、1 月以降日本人に売られた土地はなかった。開拓者である日本人は拡大をためらう方針に協力していた。そしてこの看板は眼識のある開拓者に誤った印象を与えるという理由からであった。新聞によると看板は外されなかったが“Livingston, the Community with a Destiny”(“リビングストン、神意のもとにある社会”)と書き直された。

新聞の議会での満場一致という報道にも拘わらず、公けに行う反日活動に対する支持はそれほど得られなかった。今日公然として看板を掲げた最初の決定を覚えている日本人や町の人々はいない。暖い関係が壊れるような感じがなまに突然看板が現れたとある年配の 2 世は記憶しており、また年配の白人居住者の中にはおそらく誰がそれを立てたか知っている者もいるだろうが、彼らは言わないだろうと言っていた。農業局は取引委員会が急いで行なった看板の書き替えに公然と反対した。取引委員会は最初の費用を負担していた農業局とは相談をしていなかったのがあった。

看板に対して公然と反対していたのは有名な実業家の W. B. ミンターンだけであった。彼は次のように述べている。“これらの看板は発言者にそのまま返ってくるであろう。また意図されたことには役に立たない。リビングストンにとってこの貧弱な広告は、12 年間も我々と共にしてきた日本人に対する偏見以外の何物でもない。我々は彼等に好意を持ち続けているのだ。”⁽⁸⁾

表面だって何も云わなかったけれども、日本人には常に友達や援助者や支持者がいた。看板の出来事はこれらの人々の間で信用を失わせることにはならなかった。ハリントン夫人は日曜学校や幼稚園で教え続けた。彼女の弟のオスカー・アルパナルブはリビングストン協同組合の詰込工場で働いた。ベシー・オースチン(今日コロニーの人々や子孫によって彼女の名前が言われると、一般に“友達”ということばが後に続く)は看板が立てられた時期にコロニーと直接関わりを持つことになった。1921 年、彼女はハリントン夫人に代りコロニーの幼稚園の先生として働くことになった。ここでの彼女の仕事は短時間(午前中)だったので、ナカ夫人が詰込

み工場で働いてくれるよう頼んだ。彼女は日本人協同組合の最初の簿記係となった。6カ月の予定で招かれたが、32年間コロニーで働いた。保険代理店を営み、リビングストン銀行の行員であったゴードン・ウィントンも支援者として多くの人々に記憶されている。彼について2つの話がある。1つは密かに彼が“*No More Japanese Wanted here*”という言葉から“*No*”を線で書いて消したことで、もう1つはある夜家を出て、2つの看板を取り壊したことであった。新聞は看板が書き替えられたということを報道してから、これについてはなにも言っていない。

ウィントンやオースチンなどの人々は公的・私的な2つの立場をもっていた。1919年と1920年に、ウィントンは取引委員会の議長であり、オースチンはその秘書であった。アダムズによれば、ウィントンとW.T. ホワイト（町の商人）は1920年3月、ただ単に日本人の手に渡らないよう40エーカーの農場を買ったという。⁽⁴⁾しかし、彼らは農場の購入においてウィントンは助けてくれたと記憶している。彼は1920年前後に外国人土地法に対する対応策として株式会社としたパラダイスファーム（ノダシンイチロウ家）、トーゴファーム（ヨシノ家）、ヤマトファーマーリングカンパニーの少なくとも日本人会社3社の受託者や株主であった。リアン・モリワキ・トヤマは自分の父親が事業や法律上の事柄について相談したと述べている。ベシー・オースチンの友情や支援は決して変わらなかった。

看板やボイコット、多くのリビングストンの敵意のある新聞記事にもかかわらず、町とコロニーの2つの社会の間にはそれほど不和は生じなかった。アダムズやその日本人たちは看板の言葉を強調していた。*No more Japanese wanted here*（ここには日本人はこれ以上、いない）すでにここで開拓していた日本人を追い出すというのではなく、協力して行こうという含みもあった。以前の状態はそのまま続いていたのである。

町の人々はコロニーの人々と一緒に働き、コロニーの人々はめいめい町とつながりを持っていた。カジは時々、ヤングマンカジと呼ばれ、運送会社スコーベル・アンド・デイの地区取扱人であるA.P. レヴィと一緒にコロニーの外で暮っていた。カジはスポーツを愛好する若者であった。カジ夫人によると、彼女がコロニーにやって来た頃には、すでに彼は商工会議所（おそらく取引委員会であろう）の後援でこの地域の高校生の野球チームのコーチをやっていたという。チームはサン・ホワキン・バレーのサクラメント、フレズノ、ストックトンの町で試合を行っていた。週末に農場の仕事が終ると多くの子供たちが彼の家に集まったので、カジ夫人は庭は“野球場のようであった”と言っている。1920年代になるとカジはリビングストンペッパーという町の野球チームの監督となった。彼は1924年に初めてリビングストンクロニクルによって監督としての功績をたたえられ名を挙げられた。1928年、1930年とチームの監督をし、その時、“スマイリング・ココ・カジ”と呼ばれた。カジの勧めでロクロー・ソノベは長期間チームのスコア記録係となった。ペッパーズの試合にはよく人が集り、新聞の第一面での取材もされていた。

サトウとナカも日本人社会と町の社会との重要な仲介者であった。今日、町の人々は彼らのことをコロニーの“指導者”と呼び、オクエ、タケムラなどしばしば名があがる他の人々のことを指導者とは呼ばない。というのは彼らはコロニー内部の事情については詳しくなかったからである。ナカ、サトウはコロニーの通訳であり、代弁者であった。⁽⁵⁾サトウの息子は町の人に伝えなければならない大事な問題が日本人社会の中で生じた場合には、“サトウさんに行ってもらおう”，または“ナカさんに行ってもらおう”と皆が云っていたのを覚えている。彼ら日本人は英語を自由に使える人々に自然と頼っていた。またサトウの息子はコーカサス人共同体が日本人と仕事をしたい時にはコーカサス人の誰かがナカかサトウと話をし、彼らはその話

をオクエ、ノダ、マエダ、それからその他の人のところへ行行って話をしたのであった。これらの人々は「それじゃ、相談しよう」と言って、そのために集まった。

年配の2世たちもコロニーと町との重要な架橋となっていた。彼らは町の教会の一員であり、町の子供たちと付き合っていた。1920年の夏には、メアリー・ナカがミルズ大学で一年目を終えて帰省すると、リビングストンの子供達18名が彼女を出迎えるために彼女の家までやって来た。

住民達は以前と同様に協力することによって、町とコロニーの緊張を解くために大変な努力をした。1919年に取引委員会が日本人排斥を求める決議案を初めて採決すると、あるコロニーの人が（おそらくナカかサトウであろう）、取引委員会、農業センターの代表者と、そしてコロニーの代表者が集まって、アダムズの話によれば“望ましくない開拓者”と呼ぶものを規制する方法について、話し合うため集まることを提案した。15名の委員会は町のすべての不動産屋に日本人へ土地の販売や賃貸しをするのを断るよう頼むことを決議した。アダムズが言うにはナカ、サトウ、ミナベ等は“これ以上の日本人をここにこさせることを防ぐ”という目的に貢献した。オースチンやウィストンのような人々はもちろん公的な立場と私的な立場とがあり、実際、彼らはここに居住した多くの人々を助けたが、公的な立場では編集者を満足させる報告をせざるを得なかった。

日本人は他にも努力をしている。ナカやマス・チバという名前だけしかわかっていない人が、アメリカにおける彼らの信念や、またリビングストンの平和を願うことなどについて、リビングストンクロニクルに発表している。1921年には成人用の英語教室が開かれ、冬の間毎週2回、R. A. ヒル（リビングストングラマースクールの校長）とカーリー夫人が先生で、32名の成人が学習している。短期間であったが、その学校が開かれたことは賞賛された。コロニーの人々は1922年に町に最初の幼稚園を設立し、財政的援助も行なつて、大いに貢献したのであった。

コロニーは反日感情が高まった時代を表面上は切り抜けることに成功した。1928年、1929年までにアダムズはメキシコ人、フィリピン人に目を向けるようになり、そしてコロニーでは多くの本や、町との平和共存のための論文が紙面を満していた。⁽⁶⁾ だが1919年、20年の事件は町とコロニーの関係に重大な変化を起すことになった。彼らのアメリカ人のある友だちが“いつも”あったのだがと云う偏見が表面に出て、“In a Spirit of Friendliness”（友情の精神）と題された社説でアダムズは次のように述べた。

“……ここリビングストンに於いて、我々は今も日本人を尊敬しているが、あなた達は initiative（発議権、国民発案、1920年の外国人土地法）に対する争いに、サンフランシスコやその他の地域の同郷人と一緒になって参加すべきではないのです。またその運動に財政的に援助する者がいるならば、直ちに止めなさい。あなたがたの家や近隣は安全であるのだから、余計な干渉をするのをやめなさい。ここに住むなら、今までどおりにはしていなさい。好ましくない言動は慎しみなさい。”⁽⁷⁾ これは明らかに脅迫であった。

コロニーと町の関係が公然と冷るにつれて、コロニー内でもひどくなる不景気とその圧迫から生じる問題にぶつかった。ボイコットにかかわらず、（おそらく最終的にはこれは直接効果はなかったろうが）1918年に始まった新しい開拓者の流入が1922年まで続いた。だが公然となっていた反日感情が大量の開拓者流入を止めたのである。コルテーズ（安孫子の3番目の開拓地）のコロニー化に手を貸すため大和コロニーに来ていた安孫子の協力者、シマノウチは看板が立てられているのを見ると諦め嫌けをさしてしまったという。彼は土地を売るた

めに来ていたのであった。看板を立てられると、近くの人が“商売がなくなったでしょう”と話したように彼は仕事を失くしてしまった。⁽⁸⁾

日本人ボイコットと排日の看板は1920年、21年、22年に土地販売を止めさせることはできなかった。新しい開拓者は以前のコロニーでは珍らしくなかったように、またカリフォルニアの他の地域でも一般的になっているように、にせの会社の名前を使って土地を買った。彼らは日本人に適用する法律の専門家であるガイ・カルデンの手を貸りた。カルデンは安孫子とともに働いた経歴をもつサンフランシスコの弁護士であって、これらの会社の代理人として働き、時として株を所有した。初期の会社と同様にこれらは違法であった。法律が要求していたように株主の大部分が市民であるという会社は見当たらなかったが、土地を買うことや借りたことで問題があったという日本人の報告はひとつもなかった。

彼らは会社組織によって権利を得た。会社の名前はキリスト教的感情を反映して、Grace（恩寵）、Eden（楽園）、Mercy（あわれみ）、Peace（平和）、Truth（真実）などの名をつけた農場会社であった。Lucky, Delicious, Hope, Favorite などの希望に満ちた名前をつけた会社もあり、また Crystal, Eagles, Maple Corola など詩風の名前をつけた会社もあった。子供の名前や隣の子供の名前を使って土地を買った1世もいた。市民として2世たちは土地を買うことができた。1世たちはその後見人となった。

1920年前後に、日本人は大和コロニーのほかに、クレシイコロニーと町に近いメルセド川沿いの低地にそれぞれ離れてはいたが、この3地区で人口増加がみられた。⁽⁹⁾ 1920年、21年と大和コロニーにはホシノ、オオクボ、カシワセ、キノシタ、ヨシノ、セノの6家族が新しく加わった。3家族は町から、3家族は他の農場から来た。個人的な交際はここでも重要であった。例えばコロニーの人から勧められてやってきたのであるが、この時代になるとコロニーの生活の豊かさが人々を誘うようになっていた。大農場には仕事があり、買う土地もあった。その子供たちの中には自分たちの親がまた共同体がキリスト教であるということ、子供たちにとって健康である田舎の環境ということのためコロニーに来たと思っている者もいる。彼らの多くはキリスト教徒であった。

隣のクレシイのコロニーも拡大していった。1925年には10組の家族がいた。1920年以前に大和コロニーから来た者も数名いたが、大半は1920年から22年にかけて土地を買った人々であった。大和コロニーと同様に個人的つながりは重要であった。安孫子とつながりのあった家族も数組いた。例えばチヨサク・スズキの父は日米勧業社で働いていた。安孫子は何か月も給料を払うことが出来なかったため、その代りに土地を貰い受け、息子夫婦が入植した。コミュニティの他の人達は親戚や友達でグループを形成した。キムラやシバタはお互に40エーカーの土地を分けている。彼らは従兄を通じて知りあっており、キムラ夫人を通じて大和コロニーで家族同士親しかった。マツモトはトヴジヨウ家の人々と友達で、あとで来たタナカはタンジ家の人々と同じ村の出身者であった。

クレシイへ来た開拓者の多くは農民であったが、中には大和コロニーと同様に経験のない都会生活者もいた。⁽¹⁰⁾ これは問題を起こす原因となった。スズキ夫人は次のように語った。

“私の父（義理の父）は都会育ちの人で、農業については何も知らなかった。彼はただ地図を見て、近くに鉄道が走っており、また数か所水路が通っているのでこの土地を買った。彼は都会の人で、そのため生産物を積むための汽車が、どこでも停まるわけではないということすら知らなかった。いいですか、駅まで物を運んで行かなければならないんですよ。線路の近くなると何の役にも立たないんです。水路はあっても土地の高低はまちまちですから、或る所は高すぎて水を引くことが出来ず、あちこちで一尺くらいの違いがあったのです。で

すからここを開拓しようとしていた頃は、本当に苦しかったのです。3年、4年、5年と例え一生懸命働いてもお金にはならなかった。最終的に借金がたまるばかりなので破産することを選んだのです。何の希望もなくなっていたのです。”⁽¹¹⁾

クレシイ近くの河川沿いの低地ではモリウチ、ミトベ、ヨシダが蔬菜栽培を目的として入植した。モリウチ一家は最終的には40エーカーの土地を買った。他の家族は土地を借り、定期的に移動していた。

1920年代にコロニーや、その周辺の発展は続いたのであるが、分裂は進んでいった。クレシイコロニーは大和コロニーと関連した開拓地であるが、お互に離れた開拓地として発展した。クレシイへ行った数名は大和コロニーの人々であった。お互の友情は共同体の境界を越えて育まれたが、2つのグループ間の絶対距離は基本的な分裂の原因となったのである。車のない時代ではクレシイの農場主にとって大和コロニーの中心地までの4.5マイルの距離はしばしば訪れるには遠かった。

距離が離れているその不便さのために、クレシイの開拓者達は自分達の小さな共同体を中心地として形成することになった。大和コロニーの教会に行くより、家族的な祈禱会を開き、隣人と会った。改宗者たちはトウジョウ家の人々やミヤケ、マツモトなどの隣人の影響を受けたのである。

1920年も過ぎると、この新しいグループは別の協同組合を組織することになる。トウジョウ、コザワ（早くから開拓を行なったこの2人の土地はすでに生産を上げていた）は企業に最も興味を持っていた。管理者が選ばれ、彼らの家には電話が取り付けられた。詰込み工場が線路近く（今日のクレシイストアー付近）に建てられ、箱作り用の材料が購入された。その後2、3回の収穫期にクレシイの開拓者たちは自分たちの生産物を大和コロニーとは別の協同組合で詰込み、出荷するまでになっていた。

しかしクレシイ協同組合は十分な生産を上げることが出来なかったので、2、3年でたたんでしまった。そしてクレシイコロニーの人々は和歌山県出身の人々が数の上でコロニーの有力グループとなっていた。今日、多くの人々が“和歌山”と“和歌山以外”のグループという言葉を使って、当時の開拓と社会化の状況を述べている。和歌山県出身の開拓者はタニグチ、タカハシ、キシ兄弟、ミナベ、ハマグチなどの初期の開拓者やオクダが加わって、通称オリーブ通り沿いに住んでいた。クレシイのユーカー通りにキムラとシバタが土地を買った。和歌山県出身の人々は非常に仲が良かった。多くの男の人が夕食の後、お茶や話し合いのためタジロウ・キシの家へ毎晩集まった。和歌山出身以外の新しい開拓者は、別の社交グループを作った。懐しい友情を思い出しながら、ある2世は自分の社交グループでは自分の家族（キリハラ）と、若かったトモエダ、イマムラ、モリワキ、イシハラ、オオクボ、そしてホシノなど“和歌山出身以外からなるグループ”であったと語っていた。その中の1人の娘は月に一度集まって“ハッピークラブ”と呼んでいたのを覚えていた。彼らは共同の餅搗を行って新年の準備をした。このグループは皆新しい入植者であった。

1920年代、さらに人々が来て開拓が進むにつれて、大土地所有者と小土地所有者へと共同

体が発展の初期にみられた分裂はさらに深化していた。クレシイや大和コロニーでは殆んどの入植者は20エーカー～40エーカーの土地から開拓が始められていた。カシワセが一番の土地購入者であった。彼は大和コロニーに20エーカー、コルテーズに100エーカーの土地を購入したが、2人の協力者が手を引き、農産物市場の悪化のために、彼はコルテーズの農場を放棄してしまった。

古くから住んでいる人と新来者は土地の面積と同様に家や農場でも対照的であった。年配の大土地所有者は経営規模を拡大し家も建て替えていた。また桃の乾燥用地や詰込み小屋、既婚労働者のためのキャンプハウス、独身者のための合宿所、車庫、納屋、鍛冶屋、そして他にも建物を持っていた。新来者はここに来る時、資本金を余り持っていなかったから農場の規模は小さかった。ある1世の婦人はクレシイの最初の家を不毛の地に囲まれた“掘って建て小屋”と表現していた。

新しく来た家族の中には提供されたキャンプハウスの雇用者の農場に当初住む者も何組かいた。彼らは土地を買おうと、たいてい2間の家を建てて移り住んだ。

2世の子供たちはその違いに気がついてきた。気おくれも、非難もせずにある2世はこう語った。“私の父は遅くなってから来た。父は20エーカーの土地をもつ百姓にすぎなかった。”このことばを多くの人から聞いた。またある2世は“時々雇用者の家へ招待されましたけど、まるで宮殿へ行く様な気がしました。御存知の様に階級による違いはありました。我々は労働者で、彼女（雇用者の夫人）は女王でした。”農場について話しながら、その家を“大邸宅”と呼んでいた。

新しく来た開拓者と古くからの開拓者の経済的差異は大きく、また不景気によってさらに拡大した。軍需景気は終り、価格が下落し、1929年の市場崩壊が起こる以前からすでに農民は困難に直面し始めていた。マスダは1921年が“よい年”の終りだといっていた。1920年禁酒法成立のためにぶどう酒市場は終りを告げた。過剰生産は価格の暴落をひき起こし、出荷用の列車は不足した。リビングストーンクロニクルは1922年の荷車不足は深刻で、予測された高収益は実現しなかったと報道した。

1924年には食用のぶどう市場が崩壊した。コロニーの大部分の土地は最もひどい影響を受けた食用ぶどう（Malaga）の栽培を行っていた。1926年にリビングストーン銀行が閉鎖された。⁽¹³⁾ 1927年に桃が樹になったまま腐っていると新聞が報道している。大和やクレシイでは大農場も小農場もこの不景気の影響をひどく受けた。食用ぶどうは桃の果樹園の中間にあって僅かの土地で栽培されていたが、両者の主要な産物であった。⁽¹⁴⁾ 年配の大農場主の中には軍需景気で拡大しすぎた土地をすべて失なったり、また大部分を失なった者もいた。小農場主の中には保守的で慎重な経営によって自分の農場を固めた者もいた。マスダによるとこの時期の新来者は農場を始めることさえ出来なかったという。クレシイでは多くの人々があきらめ、曖昧な名前の思い出のみを残し去って行ったのであった。

不景気はあらゆることがらを困難にしていた。1世の多くはぶどう園で幾日か働いた後、収穫期になると、樹からぶどうの実を落とすように言われたのを覚えている。それはぶどうを摘んで売るならば、ぶどうの箱詰めと出荷の代金は即借金となるからであった。

農場主たちはできるだけお互いに助け合い、これに対処する様々な手段を見つけるため努力した。ある者は季節労働者として外に出て働き、冬になってから果樹園やぶどう園の刈込みをした。

ジュース用や、特にデザート用のぶどうの小規模な市場性は作物栽培の多様化を進めた。タンジは苺の栽培を始めて、メルセドの市場へ出した。ネクタリンやプラム（西洋李）などの果

樹や梨が栽培された。接木の技術も普及したのでさかんに行われ、レッドマラガ、リビエールやいろいろな種類の外国産のぶどうが栽培された。市場取引がゆきずまって少なくなってくると、個人での販路を見つける者もでてきた。マエダは果実を直接消費者に販売して、大きな成功をおさめた。タジロー・キシは息子のロイを毎年夏になるとコロラド州デンバーに送って、自分のところの果実を市場に出荷した。

金銭面では不足を、信用貸しや借入手段を見つけることで切りぬけた。クレシイのフェスラーズやリビングストンのエスレフィールドズという2人の商人は、収穫の少ない冬に助けになってくれた人として記憶に残っている。

協同組合もまた銀行から金を借り、それから個人に借し出すという方法で資金源を提供した。古参の安定した農場主は時に新来者にお金を貸したり、余分な食物の入った箱がコロニーの人々の間に回されたのであった。

財政的圧迫の拡大は、共同体全体を分裂の危機に追いやった。1927年には協同組合員の意見の相違によって、リビングストーン果実栽培者組合（同年株式組織となる）とリビングストーン果実取引所（元リビングストーン協同組合——公式には1929年果実取引所として株式組織となる）とに分かれたのであった。

協同組合の分裂は今でも扱いにくい話題で、いろいろな理由があるようだ。本来平等に分けられるべきであったものが分けられていなかったとか、責任は同じく負わされていないとかいうような感情論や、出荷の質とやり方、さらに組合の経営への不満もあった。また金銭上の問題を指摘する者もいて、回転資金用の貸付け金の不平等を恨んでいた者もいたという。⁽¹⁵⁾（ある2世は大農場主と小農場主の分裂のことをそれとなく語った。）

分裂の理由が何であれ、コロニーの人々は日本での出身地と農場規模によって分かれた。最初の協同組合（後の果実取引所）に残った人々は比較的小農場主であり、新しい協同組合（果実栽培者組合）（LFGA）には当初の12人のメンバーのうち10人まで和歌山県出身で占められ、大体共同体の中でも大土地所有に属する人々であった。

協同組合の分裂で各グループは施設と人事の問題が発生した。シンイチロウ・ノダが1914年から1922年まで最初の協同組合を運営していた。彼は北のチョコ、マリースヴィル、カルーサで米の栽培者組合で以前働いていたと思われるトヨジ・コンノから組合の運営を引継いだ。組合が分裂するとベシー・オースチンは数年間で急激な取引高を延ばした果実取引所に残った。そのグループは1927年から1928年まではセレーズ⁽¹⁶⁾の人であるクロード・ベリーヒル、1928年から1929年まではノブタダ・サトウ、そして1929年から1931年まではリキマル（分裂以前は本屋であった）を雇った。⁽¹⁷⁾

果実栽培者組合は新しい施設と市場に加入することが必要であった。サザン・パシフィック鉄道はこの組合の事業の拡大を予想して、組合に相談なしで出荷工場を建て、低い金額で貸し、工場まで鉄道を敷いて応援した。詰込み施設や箱作りの設備は今日のものと比べるとかなり簡単なもので、安価なものではあった。また市場として、他の全国的な組織のパシフィック果実取引所に加入した。

1920年代のコロニーは多少町らしくなった。2つの協同組合のほか、教会や幼稚園もできた。依然として商店は無かったが、日本人商人がトロックから日本食を、また漁師が魚の行商にやって来た。コミュニティには病院はなかったが、助産婦の経験を持っている者が数人いて大いに助かった。

年配の2世たち（ノーマン・キシ、ロイ、カズオ・マスダ、サム・マエダなど）は町の学校に通い続けたが、コロニーでも2世のためにいろいろな活動が組織化された。例えば日本語学

校は最初にエトウが教え、彼の家で授業が行われた。ワタナベ兄弟の妹であるオキ夫人は日本の大学を卒業して、カリフォルニア大のバークレーで学んだ人で、後になると子供達はこのオキ夫人から日本語教育を授けられた。しかしすべての2世たちがこれらの授業に通ったわけではなかった。ノーマン・キンはオキ夫人のところには行ったが、エトウさんのところには行かなかったと云っていた。“しかし、それはどのくらい続いたか覚えていない”と。

2世たちはまたレクリエーションのために、教会のテニスコートではテニスが行われ、ヤマト夫人、ヤギ、オキさんのような比較的若い1世を相手に楽しんでいた。またピックアップ野球をしたり、長い午後はキンの家でカードで遊んだ。彼らが高校へ行く頃には野球チームが作られ、「カップス」と名づけ、サンホワキンバレーの2世のチームと試合した。また1世たちのYMCAグループはバスケットチームの後援者になった。連盟に参加はしていなかったが、ノダ、ロイ・キン、ノーマン・キン、サム・マエダや他の面々はYのイニシャルのついたユニフォームを着て、コーカサス人のチームと試合を行った。

1920年代のコミュニティの生活は教会の周辺が中心で、いろいろな施設が設けられていた。1921年までにYMCAの建物は3,000ドルかかって完成していた。教会とは別に幼稚園、談話室、YMCAの事務所、そして集会所があった。それらの建物は木造の外壁が赤いペンキで塗られていたので“赤い建物”と呼ばれていた。YMCAはテニスコートを作り、1920年代初めに完成し、1925年にはコート表面を新しく整備した。また教会のすぐ近くには野球場があった。

1920年代は西海岸の日本人キリスト教徒とコロニーの人々と接触を益々深めた時期でもあった。1920年代の初頭、おそらく1923年か1924年であろう。2世たちが通う高校や大学のために青年太平洋岸キリスト教協議会が組織された。バークレーで北カリフォルニア青年太平洋岸キリスト教協議会が開かれたが、まもなく地区協議会が組織された。リビングストンはフレズノ地区の一部で、モデストからベイカーズフィールドまでの範囲であった。その協議会は祈りや聖書研究に加えて、日曜学校の役割や教育の必要性というような話題について話し合ったが、“我々は宗教的な理由というより社会的理由のために出向いていった”とノーマン・キンは云う。毎年行われるバークレーの協議会や、時々行われるフレズノ、コースタル、ベイ・エリア、そしてサクラメントの地区協議会を通じて、ノーマンや彼と同じ年頃の若者たちはコロニー以外の広範囲な他地域の町や村の農場に住む2世たちと親交を結んだのである。

2世たちがさらに広く社交界へ進出しはじめると、教会の活動もまたさらに範囲を広げ、定着していった。ところが不況が深刻になってくると、いろいろな問題が派生した。まづ、コロニーの人々が牧師を援助するのが難しくなってきたこと、また教会が宗派協議会のどれにも加入していないので、牧師を見つけるのが殆んど不可能であった。フジイ牧師が去った後、コロニーは牧師なしに数年間を過ごした。新しい入植者のセノさんは牧師の資格をもたなかったので、平信徒の牧師として数年間仕えていたがいろいろの不都合の面が生じてきた。例えば“葬式があるたびに、牧師を連れてくるのにお金を払わなければならなかった”と。これらの不都合の結果、1929年にコロニーの教会はメソジスト協議会に加入し、名前もリビングストン日本人キリスト教会からリビングストンメソジスト教会に変え、太平洋沿岸日本人メソジスト協議会のメンバーになった。この加入には共同体内のメソジストと組合教会の信者間とで決めかねる問題のために遅れたといわれている。それはコロニーではかつて組合教会と長く結びついていた（例えば初めの頃フレズノから来てくれていたフクシマ牧師を通じて）が、いろいろの理由でメソジストへ傾いていった。カズオ・マスタによると、金銭的援助を申し出たのはメソジストだけだったという。オクエ夫人は当時、最も勢力のあったグループはメソジストで、長

老教会や組合教会の協議会は牧師を送ろうとしなかった。1世たちはまた親子が同じ教派に所属するのが最もいいだろうと考えていたという。すなわち年配の2世たちは概に前から町のメソジスト教会に関わっていた。メソジスト協議会の監督であったフランク・ヘロン・スミス医師もまたおそらく重要な役割を果たしたのであろう。コロニーの教会がメソジスト教会に加入する時、彼は積極的に他の多くの独立教会をメソジスト協議会のメンバーにしていた。

コロニーが教会を通じて他の日本人共同体社会の中で一層定着するようになったこの時期は、コロニーがよりアメリカ化されていった時期でもあった。このことは特に2世の生活の中に明らかにみられる。コロニーの人々にとって子供たちが増えてくると、いづれアメリカの小学校に入れる準備をしなければならなくなり、さしあたりコロニーの幼稚園を町へ移動させようということになった。学校を学区に託するためには30人の生徒と財政的援助が必要となる。最初に作られた幼稚園の先生によると、日本人園児とアメリカ人園児の合計は設置人教を充足し、財政面では日本人が先生の給与の4分の3を支払い、残りを学区で支払うということをし合せて、1922年最初の幼稚園が町に出来た。コロニーの子供たちの多くは英語が解らなかったが、すぐにアメリカ人のクラスメイトができた。ハリントン夫人が子供たちの先生になると、1世たちは彼女を頼り、彼女は時々コロニーに招かれて園児の母親たちと会った。彼女はテーブルセティングや他のアメリカの習慣のことを話した。

1920年代、最年長の2世たちは町の教会へ通い、年少の2世たちは町の幼稚園に通わされ、その中間の2世たちもコロニーから町へ通うようになっていった。最年長の2世と後に最も大きな勢力となった1919年生れまでの世代は、コロニーの教会の日曜学校に出席し始めていた。そのクラスでは牧師の妻とパークレーで数年間勉強し、英語を上手に話すオキ夫人が英語で教えていた。この様にして2世たちの英語力は向上していった。

2世たちは自分たちが年齢によっていくつかのグループに、分けられていたという。カズオ・マスダ、ノーマン・キン、ロイの最年長グループは別にみられていた。この最年長の2世は不況が深刻になる前に小学校高学年や高校の前半を終え、後に生れた2世たちとは対照的に農場で働かずに済んだ。

最年長の2世たちは町の社交グループでは積極的に活動していた。キン兄弟がボーイスカウトに加わり、後に少年たちの数人が町のバンドに入り演奏した。帽子をかぶり高えりの上着を着た。ノーマンは“ぶざまだったけど、ユニフォームなのでね”といていた。そのバンドは屋外で定期的にサマーコンサートをを行い、時々、町を出て演奏を行うこともあった。新しい楽器を買うだけの余裕があった。カズオはクラリネット、サム・マエダはトロンボーン、ロイとノーマンはサクソフーンを持っていた。

子供たちは町の日曜学校へ行かされた。教会の活動は学校生活の中で重要な部分で、その結果多くの友達ができる。ナカの娘たちは町の教会グループの友達と家でパーティーを開いたり、日曜学校のピクニックやエピワースリーグのフランクフルトピクニックへ行った者もいた。高校へ入ると少年たちの数人はクラスメイトと同じように自然とガールフレンドと交際を始めるようになった。ある2世は“1世たちはとてもナイーブで、教会が関わっている限り、私達の交際は安心だと思っていたのじゃない”と言っていた。実際に彼女はピクニックやバーベキューパーティーでペアになった男女がお互いのためにホットドッグを焼いたり散歩に出かけたりしたのを覚えていた。“私たちはみだらと思われていることは決して何もしていません。けれど私たちが夜一緒に散歩に行き、手を握りあっていたことを知っていたら、さあ何んて云ったでしょうかしら。”もう1人の2世も銀行家のゴードン・ウィントンの息子のドン・ウィントンの家で開かれたパーティーによく行ったのを覚えていた。ドンは彼をコロニーの家

まで向えに来てくれて、パーティーが終ったあとで送ってくれた。“彼はすばらしい友達だった。あのやさしさは忘れてはいけないものだわ。”

カズオ・マスダが言ったようにダンスは1世やメソジストらには好ましく思われなかったもので、大部分の2世たちはダンスを習わなかったけれど、ノーマン・サトウ、キン兄弟たちはなんとかやっていたようだ。それはケンジ・ワタナベの友達の1世がワタナベの家を訪ねに来たときに、サトウ、キン兄弟が2・3週間ワタナベの家で、その友達からダンスを習ったのであった。ノーマン・サトウは、“もし私の母がダンスを習っていたことを知ったなら、ワタナベさんと2度と話しをしなかったろうし、女の子のところへ行って太郎とは二度と腕を組まないでと言っただろう。”彼等はダンスだけでなく、コーカサス人の少女とも付き合っていた。（コーカサス人のクラスメイトとは付き合いがなかった若い世代の2世にとってはショックなことだった。）

ノーマン・キンは次のように言った。“もちろんアメリカ人の女の子とはデートをしたよ。デートをした相手は彼女たちだけさ。日本の女の子とは付き合わなかったんだ。”彼と弟はバスに乗って学校へ行った（リビングストーンにはまだ高校がなかったのでメルセド高校に通っていた）が、後になるとパーティーのためデートの相手の家まで車でむかえに出かけたものだった。

とにかくタジロウ・キン家では子供たちの友達つきあいには困ることはなかったが、異なる人種間の交際や友情が2世たちによって1世から離れて、変わりつつあったということである。2世たちはそれぞれ日本人コミュニティの中の自分というものと、コーカサス人の町の中の自分というものの2つの面を持っていた。この2つの奇妙な混合は名前に反映されている。カズオ・マスダは“カズー”として知られるようになった。町の人々が最初にこのように呼び始めたのにちがいない。というのはこのニックネームは日本語にはないアクセントで発音されるからである。やがてそれはコロニーの2世たちが彼を呼ぶ時の共通の名前になった。ノーマン・キンとノーマン・サトウはそれぞれいくつか名前を持っていた。ノーマン・キンがつけられた名前は“ミノル”であり、町の人々は“ミノー”と呼び、“ミン”と呼ぶ者もあった。ノーマン・サトウは高校を卒業した直後に“ノーマン”という名前に決めた。彼の付けられた名前は“タロー”だったが日本人やコーカサス人は彼のことを今も“キューピー”とか“カップ”と呼んでいた。3人の高校の友達が彼が野球をしているのを見て、彼のひざがキューピーの人形のようにくぼんでいると言ったのでキューピーになった。ある晩のパーティーで誰かが“Kewpie”を“Cuppie”と誤まってスペルを書き、ニックネームがそのまま“Cuppie”となってしまった。年配の2世たちはより多くの時間を町の人々と過ごしたが、年少の2世と同様に彼らは日本人でもなくアメリカ人でもなかった。彼らはアメリカで将来を築くために育てられていたので、町のグループへの参加は正当な一員としての証拠となった。だが彼らは日本人であり、政治的にも法的にも永遠に“外国人”とされる人種的に分離された人々であった。張り紙やボイコットがあるということは、笑む商人やにこやかな新聞編集責任者がいなく他の感情の表出に外ならなかった。2世たちは直接には容認、間接的には反対というはざまに存在した。例えば“我々の日本人は立派である（先駆者、名高い紳士）。他の日本人はそうではない（後に来た者たち、大抵の日本人）。”“あなたがたは我々のようである（バンドや日曜学校、エプワースリーグのメンバー）、しかし日本人はそうではない（排斥の支持、2世が市民権を認められないことを勧める決議の署名）。”などがあった。

言葉に出して言う者はいなかったが、反駁は激しく疑いもなく苦しいものであった。ある人は看板について次のように感じていた。

“1世たちはこれについてはよく感じていなかったが、排斥されているとは思っていなかった。彼らの関係はそれ程よかった。誰も面と向かって何も示さなかった。実業家なども面と向かっては何かを示さずに、とても親切だった。高校の友達や親友に関する限り、敵意は全く感じなかった。友達は友達であった。我々を嫌っていた人達とは交流を持たなかったし、また彼らも我々とはつき合わなかった。日本人をひどく嫌っていた人もいたかもしれないが、彼らともつき合わなかった。我々は友達の殆んどはキリスト教徒で、このことは重要であった。我々は“隣人を愛せよ”と教えられていた。日曜学校やそこのピクニックにも行っていた。キリスト教社会であること、他の人との交流はなぜ我々が反日感情の辛辣さを感じなかったかということに関わっていたと思う。私はそのような偏見は全く感じなかった。ミンやロイなどと集まった時でもそのようなことは話さえしなかったし、我々の感情を声に出すことさえしなかった。我々は“あの看板についてどう思う”とか、“あんなものを立てるなんてひどいことだ”と言ったかもしれない。しかしそれは看板についてのことであった。私は多くの白人（コーカサス人）が同じように“あんな看板を立てるなんてひどい”と感じていたかもしれないと思う。小さなリビングストンの町ではそのようなことは少なく、看板が撤去され張紙を破り捨てると、2度と看板は立たなかった。”

後に、彼はその看板は“日本人のことはもうまっぴらだ”ということの意味していたし、また“気を悪くさせられた”と云った。彼はそのことについて数人のコーカサス人と“我々はお互にうまくやっているのだから、あんな看板はくそくらえだ”と。しかし、彼はリビングストンの白人のうち誰も公然と日本人のために立ち上がらなかったことに腹を立て、残念に思っていた。おそらく彼の気持ちで一番言いたかったのは看板のいやな思い出であろう。彼はただ1つの看板のことしか覚えていなかった。今でもそれを思い出すと言っていた。その看板は横6フィート、縦8フィートぐらいのものであった。彼はそれが高速道路のカーブのどの場所に立てられていたか正確に知っており、それには“*No More Japanese Wanted Here*”（ここにはもうジャパニーズはいらない）ではなく“*No More Japs Wanted Here*”（もうジャップは来るな）と書かれていたと覚えていた。この2つの表現の表面上の細かい違いは別としても、新聞や別のものから、看板の本当の意味が何であるか解ったということ彼の記憶に残っていたのである。

もう1人の2世の反応は違っていた。彼は当時、13才ぐらいで町へ行く途中しばしばそこを通っていたに違いないが、そのような看板を見た覚えはないと言っていた。気をつけて見てはいなかった。

不景気が続くと、町の人々とコロニーの人々の間の距離は広がり、年配の2世にも若い2世にも影響がでてきた。1930年代には、リビングストンの外での偏見は年配の2世たちにかぶさってきた。若い2世たちは別の世界で成長していった。

VIII 2世の時代 1930—1941

1930年代の不況は続いたが、コロニー社会は十分に発展し、物質的にも、社会的にも、経済的にも十分に確立し、次の世代に注意が向けられた。日本人への安孫子の理想は、この世代の子供たちの生活の中で結実する一方であったが、また失うものも多かった。2世達は1世がアメリカで築いた固い団結と、確立した社会の中で成長したが、彼らが仕事を見出し、他の場所で大人として生活を始めようとした時期は、偏見のために自由に簡単にこの社会から旅立つことは許されなくなっていた。

追 憶

2世の最初の結婚式がコロニーで行われた：1934年1月27日ノーマン・キンとトクコ・ドウモトの結婚式である。

トクコ・ドウモト・キン：“私はこの式を共同体の結婚式と呼んでいます。ご存知のように不況の真直中で行われたものです。私の妹だけ呼んで小さい式を計画したのですが、皆さんは幾分かでも大きな式をあげるように望んでいました”。

ノーマン・キンとトクコ・ドウモトの結婚式は共同体全体で盛大に行われた。キン一家の友人達が準備を手伝った。7人の婦人達が料理を3日間かけて作った。お寿司と焼き鳥が作られた。鯛は伝統的にめでたい時に出されるものだが、準備できないので代りに数百匹の小さな魚を用意した。何升というご飯が炊かれ、多くの鶏が料理され、次に魚の料理が始まった。一匹一匹の魚の尾に新聞紙が巻かれ（尾を焼かないために）少女たちは披露宴で日本舞踊を舞うため練習をした。母親たちは着物を縫い、キンの隣のタニグチ夫人は子供たちに歌と三味線を合せるべく準備した。男性らは会場を掃除し、テーブルと椅子を会場一杯に並べた。

すべての準備が終り、200名以上のお客さんが教会の結婚式と披露宴に出席した。花嫁の希望で式は英語で行われた。

第1式

司会者、E. G. アダムズ

祈り

セイノスケ・オクエ 日本の結婚の歌

ヨシタロウ・マエダによる新郎の紹介

新婦のおじによる花嫁の紹介

食 事

コロニーの婦人たちによる料理と配膳

ウェディングケーキのカット

第2式

祝いの演説

2世を代表してカズオ・マスダ

町を代表してゴードン・ウィントン

コロニーを代表してキヨジ・オオクボ

新郎の父による返しのことば

新婦の父による返しのことば

特別客の紹介

宴会のプログラム：ヒデオ・トモエダの司会による日本の歌と踊り

このプログラムの後、日本の習慣に従って引き出物が客に渡され、祝いに包まれたウェディングケーキと、よく選び美しく並べられたお寿司、焼き鳥、そして上品に調理された魚で一杯の折り箱を持って散会した。

仕 事

メイム・キン・ノダ：“子供の頃の生活はどのようでしたか。”

“ただ、皆ながよく働いていたことだけは覚えています。母もよく働いていました。畑に出

て父と同じくらいよく働いていました。父が働きにいかなくてもよい日はとてもうれしかったものです。今日、仕事に行くの、行かないのと聞いた覚えがあります。いつも日曜日が待ちどおしく、父が仕事に行かなければいいなあと思っていました……。”

“私達はタンクハウスに住んでいて、フレッドはそこの一番上の2階に寝ていました。いま台所になっているところに両親とルーシーが寝ていました。シャーキーはどこで寝ていたのかわかりません。ミホと私は壊れた床で寝ていました……。”

“男の子は畑に出て働いていました。私は家事全部をこなしていました。小学校を卒業する頃までにすべての食事を任かされていました。8年生になる前に、7年生か6年生の頃だと思いますが、買い物もすべてのことも任かされていました。”

“料理はすべて私がやりました。タンジさんがくれた籠に一杯の苺は、摘み取られたばかりのもので、その時のことは決して忘れません。私はジャムを作ろうと思い、作り方を見ました。‘洗う前に重さを計ること’と書かれてあり、それで重さを計って、へたを取り、洗いもしないで作りました。そのジャムにはへたや葉が入っていました。その時、10才か11才だったと思います。それを捨てたのかどうかわかりません。”

“午後は泳ぎに行ったのを覚えています。毎年夏になると、私達がよくするのですが運河に行きました。キンハラさんとカンワセさんとスミタさんの家の人達と一諸に泳ぎ、ポールでも遊んだものでした。滝の上ではよく泳ぎました。私達はあらゆることをして遊びました。それから家に帰るのを忘れ、夕食の仕度をするのを忘れました。そお、マッシュポテトを作ろうとしたのを覚えています。ミルクを入れすぎて、ポテトスープのクリームのようにになりました。全くひどい食事を作ったものでした。私達が栄養失調でなかったのが不思議なくらいでした。”

遊 び

フレッド・キン：“我々は夏が待ち遠しく、裸足になって行きたかったものだ。どんなに裸足で出かけるのが待ち遠しかったか。母が暖かいから裸足になってもいいと言うのが待てなかった。水がたくさん流れている深いところが好きだった。砂はほとんど小麦粉のようで、足の指に入るととても気持がよかった。”

アメリカで

1世である母親が次のように語った。“子供たち誰にも日本の名前をつけませんでした。排日の看板があった時期に生れた子供たちです。私の夫は子供たちには英語の名前をつけるべきで、さもなければ皆なは子供たちが日本へ帰ると思うでしょう”と。数ヶ月後、息子は私に“生れた国にもどったらいいじゃないか。”と言いました。いつもこのようになりました。けんかした時も必ず同じようになりました。“そんなこと知らなかったのか、誰も言わなかったのか、私達がやってきたやり方じゃないか。”

タカシ・モリウチ：“私の父は裸一貫でこの国に来た。お前は言葉も知っているし、教育も受けている。一旗揚げたらいいだろう”と。

1900年代初頭から1920年代後半にかけて、コロニーの中での変化は明らかに大きなものであった。厳しくなる法的規制、人口の急激な増加、市場価格の下落と販路の狭隘化、教会のメソジストへの転換、協同組合の拡大と分裂、それらのなかで農場主たちは経営を多様化していった。1930年代の共同体内の変化は微妙で、子供たちの生活の中にもその変化がよく見られた。1世の時代の終りを暗示するかのような兆し、コロニーと町との益々大きくなる分裂、そして戦争の不吉な予感が現われていた。

1930年代のコロニーの人口変化は第1に数の上とは異なった面での特徴がでてきた。多くの開拓者の流入やベビーブームでもなく、最も特徴的な事柄はアメリカで生れ、日本で育った数名の帰米2世である。モモコ・タケムラ、マス・オオクボなどは長い間両親と離れていたが、親元で再び暮らすようになった。リチャード・オクダ（ソータロウの息子）やケンジ・ミナベ（ウメタロウの息子）は親戚と暮らすためコロニーへやってきた。

数家族が移動していったが、コロニーの人口の減少の最も大きな理由は交通事故や病気による死であった。1933年6月、サトウとコザカ（クレシイの開拓者）がモンテカ近くで交通事故で亡くなり、共同体にショックを与えた。彼らは教会の集会へ行く途中であった。1937年、タジロウ・キシの妻のタヨが心臓病で亡くなった。彼女が死んで2年もたたないうちに、4人の開拓者が後に続いた。ハチゾウ・ハマグチ、セイノスケ・オクエ、ノブチカ・ミナベ、そしてカタロウ・オクダがトラシー近くで交通事故のため亡くなった。1940年までにコロニーで15名の1世が亡くなった。

1930年代初期と半ばではコロニーの経済状態にもほとんど変化がなかった。市場は揺れ続き、悪天候がさらに状態を悪くした。1931年には干魃、1932年にはひどい霜が降り、1936年にもまた霜の被害を受けた。

以前にもこのような状況があったように、家族も、全体としての共同体も、うち続く不況の間ただ静かに対処していった。コロニーの生活基盤の農業は大きな利点であった。食物の自給と農業の多様化によって不況をのりこえることが可能であった。養鶏から簡単な加工まで行なう家もわずかながら出てきた。農場主たちは作業小屋や乾燥小屋を建て、そこで栽培した桃や協同組合から買った果物を乾燥させたり処理したりしていた。また農業関連の仕事を見つけて働きに出たりした。モリワキとノダは市場向け野菜栽培を行っていた。また大規模な投資を行なった農家も少しあった。マエダは町に出荷工場を持ち、果実、野菜を栽培しさらに集荷して市場を拡大し、果物はメキシコ、野菜はハワイ、ワシントン、ソートレイク・シティへ送った。タカハシとハマグチはヤマトロードのはずれに乾ぶどうの乾燥室を作った。コンノが運営を助け、タカハシとハマグチと協同組合にも利益になるよう運営されたが、設備は個人のものであった。

コロニーは農業が基盤であるから常時仕事にはことかかなかった。2世達は自分のところで働き、さらに現金収入を手間取りで得ていた。箱作りや灌漑の手伝い、桃の剪定等でおそらく1日に5ドルくらいを得ていたであろう。大人も子供も大農場と2つの協同組合で仕事を見つけた。出荷工場では流れ作業で積荷を手伝ったりした。ある1世である母親は4月に苺を摘み取り始め、次にマエダの工場グリーントマト、桃の箱詰め、時期の終わりには協同組合でぶどうの出荷等を手伝うと11月になっていた。

2つの組合も各農場の農作物の多様化に対応して不況を乗り越えた。経営的な工面はそれぞれのグループのメンバーに頼った。カズオ・マスダは大学を卒業すると果実取引所の運営者として雇われた。彼は次のように覚えている。

“あれは1932年のことで、ひどい年だった。我々は東部へ出荷したが全部戻ってきた。入金がなく、最悪の状態だった。栽培者も組合も破産寸前で、人を雇う余裕など全くなかった。ちょうどその時、私はカリフォルニア大学を卒業していた。不況で全くひどい年で、32才になっていたが仕事はなかった。それで父の農場を手伝いながら家にいた。リビングストン果実取引所の支配人がわざわざ来て、誰も雇うことができないので手伝ってくれないかと頼まれた。その時から強制立退きの1942年戦争の時までそこで働いた。”

コウノの運営のもとで果実栽培組合はその生産と市場とをさらに拡大していった。この組合

は桃を扱う地方の唯一の団体で、“芝生と同じくらい青いまま”で摘み取られ、手で分けられ、1つ1つ包装され、箱詰めされ、新鮮な果物の市場へと出荷された。組合は組合員によって栽培された桃を扱ったり、なお不足の場合にはコーカサス人の農園からさらに買い入れたり、乾燥用のいたんだ桃を売ったりしていた。組合はまた種類の多いリビングストンのぶどうを利用してよりよいぶどうの市場を見つけた。ロディでは涼しい夜に赤く「炎」のような赤いぶどう（トーカー種）で有名であり、フレスノは暑さのために白ぶどう（マラガ）がよく実った。リビングストンはその中間に位置していたが、そのどちらの種類もまだ栽培することができなかったので、ぶどう園を賃借したり、外部の者から買い入れたり、或は組合員の農場で接ぎ木をしてその種類を増やしていった。組合のぶどうの出荷ではぶどう数種類、時に6・7種類も一諸にされて箱に詰められ、注文によって出荷されていた。1938年、組合はフレスノのサンホワキンウィナリィとディスティレリーを賃借した。そこで栽培をする人の中にはぶどう園を再開するために必要な保証金10万ドルの裏書きを数人がしており、かくて組合員が扱うぶどう市場の1つが手に入った。

不況の間、利益率の低い市場や人口移動などの問題は、以前には大きな変化をもたらしたものではあるが、何とか処理された。最後の問題として残ったのが1世の偏見であったけれども、直接には大きなものとはならなかった。日本人の移民、土地所有権、市民権に影響を与える主たる法律はすでに通過されていた。1世は結婚も、定住も、農業従事も安心してできたが、日本人への偏見は彼らの子供たちに及んでいた。

従前の個人同士や共同体の決定に従いながらも、時期が来ると1世たちは子供たちを大学に入れるようになった。1924年までにメアリー・ナカはミルズを卒業し、妹のローズは1928年に宗教のパンフィックスールの大学院で学び始めたが、コロニーの年配の2世のほとんどは1930年代の初頭や半端になってから卒業をし始めた。2世の男子達はカリフォルニア大学のパークレー校やディビス校のモデスト短期大学へ行った。女子達もまたパークレーの短大や、僅かであるがアームストロングビジネススクールのような職業学校に通学した。

年配の2世のグループで早く卒業した最年長の中の数名は兄弟もなかったり、家が経済的に安定して、高校時代をずっと楽しく過ごした者達であった。しかし、殆んど2世にとっては教育を受けるということは難しいことであった。カズオ・マスダはその典型である。彼は父の農場の労働者が10人から1人に減ったのを見たことがあった。最初、カズオはモデストの短大に登録していて、後にパークレーに編入し、農場の仕事と勉強を交互にしながら遅れて卒業した。他の2世たちもこれにまねをし、多くは「男子学生」、「女子学生」として勉強をしながら、お金のかかる代りに家事や料理を手伝って部屋代や下宿代を捻出した。息子たちと同様、娘たちも大学へやらされた。

2世たちが、不況の一番ひどい時に進学したということは、親も子供も教育をどんなにか大切にしていたことを示すものである。日本人には仕事の口は殆んど希望がなかった。たとえその口が見つかったとしても反日感情がその機会を失なわせた。2世たちは厳しい状況を察知し、それ故目的に向かうためにいろいろ苦勞をしていた。しかし商業や経済学などの実践的な学習も、後の就職活動には役に立たなかった。

不況と偏見は年配の2世をコミュニティへ戻らせる結果となった。もっと幸運な状況下なら彼らが町の日曜学校へやらされた時以来、大学に行ってもコミュニティより外の対外的な活動によって、農場とは別の新しい生活を可能にしたことであろう。1930年代後半には年配の2世の中から2人が日本経営の会社で仕事口を見つけ、女性の中には結婚後、共同体を出ていった者も数名いたが、多くの男性は他で仕事を見つけることができず、農場へ戻ってきた。

年配の2世たちがコロニーにもどってきた頃、大半の子供たちは成長期にあった。この2つのグループにはコロニーの中や町での活動の仕方、楽しみ方など多くの相似たものがあったが、実際の経験はかなり違っていた。年少の2世たちにとってコロニーと町との距離は大きくなり、コロニーの生活は豊かになる頃に育った。

1930年代の大和コロニー共同体はきつく団結しあった安定期であり、子供たちのための組織化された活動もそうでないものも従前のように教会が中心となっていた。日曜学校の何つかある授業に来る子供達にとって、英語で教える年配格の2世は多勢になり、校長先生はカズオ・マスタ、マキ・オクダ、ジュリア・ノダは先生として奉仕した。クレシイの子供たちも大和コロニーの子供達も、大人の礼拝の前の1時間の授業に行かされ、大人が礼拝している間、庭のぶらんこや、テニスコートで遊んでいた。多くの子供達が高校へ行くようになると、キリスト教青年会が設立された。若者達のグループはバーベキューパーティーを開いたり、遠足を行ったり、後には時々子供達の活動を手伝ったりした。

ちょうど1部屋しかないコロニーの会館が共同体の集会場や礼拝堂として使われたように、後の教会は多くの目的のために使われるようになった。1934年頃、教会に公会堂が作られた。2世達にとって残念なことには、天井がバスケットボールをするには低くすぎて、専ら集会用に利用されたということであった。土曜日の朝はコロニーの殆んど全部の子供達は日本語学校である「日本学校」へ行かされた。この学校は年配の2世たちが高校を卒業した後、ツチャ夫人の家で数人の生徒に個人的に教えるという小規模なものであったが、再び活動し始めた。それは教会でさらに大きな計画として始まった。一つはコロニー協会の教育委員会によって青少年向けの教養講座が開設されたことである。数人の牧師やその妻達、帰米者、そして1世の何人かの母親達が教師となり、日本で子供達が学校で使っていた初級の読本や書き方のための文法の教科書が使われた。⁽¹⁸⁾

もう一つは日本の武士道の現われとしての剣道をやり始めたことである。なぜ始まったのかというと、1930年代は剣道旋風がサンホワキンバレーを襲ったことによる。これは剣道を広めるために北から南へと走り回った先生が数名いたことによる。1930年代の半端になると、リビングストンでは多くの他の日本人コミュニティと同じように練習のためプログラムが作られ、ナカムラという日本人指導者と彼の助手がそれにあたった。生徒は面と胴をつけ、竹刀をもって打突するように教えられた。日本人指導者が滞在している時は、その訓練も厳しかった。練習は時々朝の5時から6時に始められ、練習前には子供たちは床を掃除した。ある2世によると“ただごみを掃きのけるだけじゃなく、床に手と膝をついて拭き掃除をしなければならなかった。練習の前に掃除をし、練習が終ると家に帰る前にまた掃除をした。裸足で古い木の床をすべり歩き、時々足の裏にとげをさした”という。そして先生がいなくなると練習のためセントラルバレーの町の試合に何回も参加した。

また2世たちは夏の夜や土曜日の午後や暇な時にはいつでも教会に集まって、テニスや野球をし、こま、ナイフ投げ、ビー玉等で遊んでいた。これらのグループでの遊びはまた一般的で、年令にはかかわらずに多くの人々が参加した。

やがてコロニーも大きくなってくると、若い2世たちは年配の2世たち以上にコロニーのグループ活動を楽しむようになった。彼らは一方で町や学校の活動にも参加した。少年も少女も学校でのスポーツ活動で活躍したけれど小柄なので、日本人同士で固まる傾向があった。フットボール選手では日本人は1～2人、大学の野球選手では数名しかいなかった。熱心なバスケットボールの選手でもCかBのチームにいた。しかしはっきりとした断絶というものはない。2世たちは学校の音楽バンドに加わったり、名誉学生団体（学業成績優秀者、及びクラブ

活動で功績のあった者だけが入団できる団体)に入る資格を得たり、時にはクラス委員になって活動した。女子は町のWCTU(女子キリスト教禁酒同盟)⁽¹⁹⁾のスピーチコンテストに参加したり、町の教会のクイーン・エステル・ソサイアティやキャンプファイヤーガールズに参加した者もいた。男子はボーイスカウトを中心に活動を続けた。これは学校のスポーツのコーチをしているカーペンターが、ボーイスカウトの責任者でもあったから、自然とそれに参加するようになったといわれている。町の子供達もボーイスカウトに参加していたが1930年代はクレシイやヤマトコロニーの子供達が数の上では一番多かった。会合は毎週木曜日の夜に開かれていた。年間で最大の行事は1週間か2週間の旅行で、ヨセミテにキャンプに出たり、1935年のサンディエゴへの旅行とか、カーペンターの指導で北カリフォルニアへ出かけたこともあった。彼等はしばしば古いトラックに乗って旅行したこともあり、そのトラックはたいてい親たちからの借りものであった。ある2世はパチェコ峠の丘の上で動かなくなった車を、皆手で手伝って押した覚えがあるという。

町での活動への参加にもかかわらず、年配の2世と同様に若い2世たちも日本人、アメリカ人という意識を感じており、それはさらに強まって、クラスメイトとの社会的距離がだんだんと大きくなっていった。これは町とコロニーとの大きな断絶という影響下に組み込まれてきた結果である。

1933年にサトウ、コザカの両人が交通事故で亡くなった時、リビングストン商工会議所はこの2家族に対して弔問することを決めた。クロニクルで、アダムズは次のように書いた。サトウとコザカの葬式は“アメリカ人と日本人の関係として、世界中の何れの共同体以上にリビングストンの歴史のなかでほんとうのキリスト教的兄弟関係を明白な証拠として再度実証するものであり、サトウやコザカのように、お互いの民族どうし理解し、尊重しあう絆のため厚い信用を送らなければならない。彼らはコロニーの建設者であり、理解ある人々の指導者であった。彼等の不在の寂しさは目に見えるようであり、リビングストンの町では彼の死をいたみ、本日日本人教会を見舞ったのである。”

アダムズは“プラサの商人は店を閉めてまでも日本人の葬式には行かないだろう”と云ったルミス新聞の記者に反論して、“リビングストンの日本人ほど世界中に熱心なキリスト教徒もいないし、本当のキリスト教徒もいない。”と社説で述べた。しかし開拓者の1世達が町とコロニーを結びつけていた関係は指導者であったサトウや、ロスアンゼルスにワタナベが亡くなり、日本へ帰ったミナベ等により、だんだんと薄くなっていったのは当然であった。

しかしその一方では数人の年配の2世たちとその兄弟と、町に近いコロニーの子供たちは町の教会の行事に盛んに参加していた。例えばトモエ・マスダとアリス・ミヤハラはクイーン・エステル・ソサイアティで活動したり、メソジストの人々が聖公会の建物を購入する計画をしていた時には、ロイ・キン、カズオ・マスダ、アンドリュー・ノダ、キヨイチ・ナカ、そしてトモエ・マスダ、トヤマ等が教会の責任者となっていた。

年配の2世たちは大学を卒業すると異人種間のデートはやめてしまい、結婚の準備のためコロニーへ戻った。彼らの多くは日本とアメリカの習慣、すなわち見合いと恋愛の間をとって結婚していった。結婚すると、彼らは組合の従業員、日曜学校の先生、2世のスポーツチームのコーチとしての任務を帯びる一方でコロニーでの生活に定着していった。1935年3月になると彼等は日系アメリカ人同盟の支部を設立した。その目的とするところは政治的、市民的活動で、日本人とアメリカ人との友情を深め、選挙への参加を広め、社会問題への関心を高め、また地方に住んでいる2世の福祉等の諸問題であったが、主たる活動は社会的なものであった。2世たちはトランプの遊びのパーティーや夕食会、休日の集まりを通じて2世の絆を固め

ていったのである。若い2世達は年配の2世達よりもさらに広い西海岸に居住する2世達と、教会の行事を通じて交流を持つようになった。この北カリフォルニアの青少年キリスト協議会には約1,000人が参加した。コロニーにも青少年教会組織がつくられ、パークレーのパンフィック宗教学校で牧師になるために勉強中の2世の学生が定期的に来た。

スポーツもまた大いに盛んになった。少年少女共に剣道に参加した。数年は少女たちもバスケットチーム「ドジャース」を作り、他の2世たちのチームと試合をした。少年たちのチームもシーズンごとにメンバーが変わり、外部に対してさらに強いライバル意識を持っていた。バスケットボールチームの「ドジャース」はマサオ・ホシノ（年配の2世）がコーチし、“オール・バレー・リーグ”で試合を行なった。野球の試合は日曜日に行われるので、ソフトボールの一番盛んな時にはその地域内でリーグができるくらいチームが沢山あった。2世の最年長者から高校生までの選手からなる日本人チームは、自分たちをJACL'S（ジャックルズ）と呼び、リビングストンの他のチームと戦った。

冬期間、2世たちはコーチはいなかったが、ケン・ハマグチがマネージャーとなって、バスケットボールチームを作った。サンフランシスコ、サンホセ、ストックトン、リードレイ、サンジャーなどのバレー地方の町々を回った。彼等は運転免許を取ると家の車を借りて、交替で試合場へ運転していった。

若い2世たちはコロニーの固い団結の中で落ち着いていられた。それは知っている年上の人々がいつも側にいたからであった。私が尋ねると彼らは“教会のことが知りたいならキリハラおじいちゃんに聞きなさい。コロニーの組合のことならカシワセさんがいい。”とあれから何年もたっているのに答えてくれた。共同体の指導者は明らかで、その強さも弱さもよく知られていた。とても尊敬されていたソウキチ・タケムラの記憶はそのよい例であろう。“ギャンブルや夫婦がうまくいかなかったことがあればタケムラさんのところへ行ったものだが、仕事のことなら彼のところに行かなかった。彼は実業家としては失敗だったから。仕事のことならサトウさんのところへ行ったものだ。”とある2世は語った。

ある2世は年配の2世のマサオ・ホシノについて次のように語った。“ホシノさんは野球チームを作ってくれて、我々は本当に尊敬していた。週の半ばには練習時間もとってくれた。他の2世でそんなに親切にしてくれた人はいなかった。”彼が日曜日の試合の前に、教会の礼拝に参加するように一生懸命説得していたことを覚えている2世も数多い。彼は“厳格”な人であり、また重要な人でもあった。彼は組合の管理者として農場を巡回している時も、その家庭の問題を忘れずに覚えていて、時間がある時はいつでも手を貸した。彼は通訳、法律のアドバイザーであり、時には（実際は共同体の唯一のサラリーマンであったのであるが）貸付けの業務も行なっていた。また彼は日曜学校の先生でもあり、校長でもあり、彼のことを“Mr. Church”と呼んでいた。

コロニーのなかでは年上との縦のつながりに加えて、2世達は同年代の友情で横のつながりを持っていた。2世の総てがはっきりとした年齢による差別意識を持っているから、自分達を年長のグループ、中間のグループ、若いグループと区分したり、時には学校のクラスによって、細分化されたりしていた。お互同志のつながりは子供の時から始まって、生活を通じて続く。教会で一緒に遊んだり、スポーツチームで争ったり、また家族と一緒に、又は1人で他家を訪れたりした。生活は共通の場において行われるから、一度ニックネームがつくと、共同体に広められ、使われ、大体その名前で長く呼ばれることになる。チャーマンはチャーキー、アーニーはユイスとなった。ハツオはハッツ、アツシとヨシオの兄弟はリンキー、シンキーと呼ばれた。

2世たちがお互に、また年長者に感じた親近感は一層強められた。日本人に対する悪口や非難された覚えのある2世は殆んどいなかったが、1930年代は他の人種とのデートもなくなり、ダンスをしたことを覚えている者さえ殆んどなくなっていた。日本人と白人はお互い家を訪ねることもめったになかった。日本人と白人の関係は暖かいものだと言ったある2世は、後で日本人の学生と白人の学生は学校では仲良くやっているが、学校から出ると、時々挨拶もしないでお互い通り過ぎていたと語った。コロニーから離れている農場で育ったある2世は“しかし最大の友達日本人であった。たとえどんなに一生懸命やろうとも白人社会には入っていけなかった”と。2世たちは学校時代に経験した断絶の原因をいくつか語っている。デートをする年頃になった時さらにその傾向は強まったといい、またある者は人数の違いを上げている。ノーマン・サトウ、ノーマン・キン、カズオ・マスダは高校生の時、クラスでは日本人は彼ら3人だけだった。1930年までは、日本人はまだ明らかに少数民族であったが、ある学校の集会で皆なが一勢に（要求されたように）立ち上がった時、2世さえ驚くほどの人数になっていた。⁽²⁰⁾

2世たちはまた嫉妬についても語っている。彼等は学校で熱心に勉強をし、成績は優秀であった。ある人は次のように語った。“我々は決して妥協しなかった。例えば、私のクラスでは成績のいい10人の生徒のうち8人がおそらく2世であった。”日本人が成績優秀者を占め、しばしば名誉学生団体のメンバーでもあった。日本人が決まって卒業生代表として選ばれ、式辞を述べるための告別の演説をするという伝統は終わったと云う者も中にはいた。つまりクラスで演説のうまい者が代わりに選ばれたのであった。

若い方の2世たちは子供時代のことを年配の2世たちとは違って話している。年配の2世たちは偏見があることには時々気がついてはいたが慣れてしまっていたし、友達もいた。だが若い方の2世たちは慣れていなかった。多くは“耐えていた”と語り、また殆んど人は自分たちに対する偏見に気がついてはいた。白人でない移民の子供たちが共通に感じる不安は肉体的違いによってさらに強まった。“大きくなると劣等感を持った。皆なそうだったと思う。劣等感を持っていたのは肉体的なことだけで、あとはどんな人にも負けなかった。我々は背が低く、小さく、みんなと違ってはいた”と話していた。

日本の軍事拡大に伴う世界情勢の中での日本の立場の変化はコロニーとそこの子供たちに大きな影響を与えた。コロニーが建設された時は日本はまだ世界政治の仲間入りをした時期であったから、コロニー社会も小さく、認められていなかった。その後日本もコロニーも変わった。1930年代にはコロニーの人々は他への注意も払わなくなり、さらに公然と母国とつながりを持つ様になった。コロニー主催の剣道大会は1920年代だったなら考えられないことであらう。しかし1935年にはリビングストン高校で剣道大会が開かれ、日本赤十字のために母親たちが包帯を作っていたのを覚えている者も多い。また募金も行われ、日本へ送付された。

1世たちは日本のことを誇りに思っていた。2世たちは、“当然、誇りに思っていたさ。母国だったから。我々は日本人なのだ。”しかし、基本的にはアメリカに対するコロニーの姿勢は、建設当初に示されたものが一貫して受継がれていた。1世たちは子供たちをアメリカ人となるよう育てた。お寺も建設されなかった。ある1人の子供だけが勉強するため日本へ送られた。コロニーの人々は子供たちに英語を学んでもらいたかったため、町に最初の幼稚園ができる時に助成金を出しており、教育の価値を高く評価していた。

うち続く不況と反日感情にも拘わらず、親達の希望で2世たちは高校を卒業してさらに上級の学校へ進んだ。町で2世を教員や町の職員として採用しない時や、どの病院でも2世の看護

婦が採用されなくなったり、看護学生をやめるように忠告された時でさえも、親たちは子供たちをコロニーに止めておくということはしなかった。家では新しい人生の出発のため準備がなされ、家に残るようとか農場の仕事を手伝うようとか親から云われたと云う2世はいない。彼等はカリフォルニア大学のバークレー校、ディビス校、サンホセ州立大モデスト短期大学、ヘルズアンドアームストロング職業学校や他の学校などへ行った。

2世たちは親たちが砂に苗木を力強く植えたように、学校では堂々としていたけれどもその将来に暗い翳りがみえてきた。年配の2世たちはコロニーに戻らなければならない状態となり、日本とアメリカとの間に戦争の兆しが現われてきた。デンマーク、ノルウェー、オランダ、フランスはヒットラーの手に落ちた。1940年9月、日本はドイツ、イタリアと三国同盟を結んだ。1941年、コロニーの2世が数名徴兵に取られた。⁽²¹⁾ その年の終りに悲劇が始まった。1941年12月7日、日本がパールハーバーを攻撃したのであった。

IX 拒まれた収穫

真珠湾とメルセド収容所 1941年12月—1942年9月

記 憶

ジューン・モリモト・キン：“なぜ思い出すことができないのかよく解らない。不思議なことに当時のことを思い出すことができない。ただアマチェ（コロラドの収容キャンプ）よりはメルセドの方が良かったのを覚えている。多分メルセドの状態がひどいためだったからかもしれないし、アマチェに移るまでにメルセドに慣れていたからかもしれない……戦争が始まったら、誰が友達で誰がそうでないか解るものだ。友達だと思っていた人の中には本当の友達だった者もいたし、そうでない者もいた。”

フレッド・キン：“実際、傷ついたのは我々ではなく親達であった。彼らの中には1906年から開拓で入植した者もいる。私の知っている人達は1910年か1912年頃に来たが、多くの人達は1920年頃に来て、土地を野兎が住んでいる所から生産性のある耕地へと変えた。傷ついたのは我々より古い世代の者で、それは疑う余地がない。ただ我々の親達がどうしてアメリカ市民になれなかったのか覚えている。事実、親達が最初にアメリカに来た時には、山野の中から金を見つけて、金儲をしたら日本へ帰えろうと思っていたらしい。しかし、実際にはお金は貯らなかった。そこで妻になる人をよんだり、日本へ帰って結婚して戻って来て、そして子供が生まれた。その時にはもうこの国が自分の国であると決め、ここで暮らすことにした。彼等はアメリカ市民にはなれなかったが、極端に我々をよいアメリカ市民にさせたかったらしい。私はそういう気持を受け継いでいる。教育を通して、いろいろな参加を通して、アメリカは自分たちの住むところであり、自分たちの国であると強調しようとした。私が思うには彼らは我々よりも傷ついた。経済的にも、道徳的にも、そして精神的にも。”⁽²²⁾

真珠湾攻撃と第2次世界大戦の勃発はアメリカ西海岸の日本人にとって大変動の始まりであった。疑いと憎しみで何年も見られた後、急に「敵」とされた。その結果約120,000人の日本人が刑務所のような「強制収容所」に入れられた。真珠湾攻撃で直接影響を受けた日本人はカリフォルニアの日系人であった。その日のうちにFBIは疑いのある「敵国人」を逮捕し始め、夜までに約1,300人が捕えられ、その殆んどが日本人であった。翌日、政府はすべての日本人、日系アメリカ人に銀行の口座を封じたので、倒産したり、危機に陥った事業体も出た。

新聞では4週間ほど比較的静かであったが、その後、反日感情が吹き荒れた。農務局、在郷軍人会、アメリカ独立戦争の子孫の会、アメリカ出身者同盟や他の組織などは中央に住んでいる「敵」を監禁することを強く求めた。政府はすぐに答えた。というのは1月29日に司法長

官が最初の強制移動命令を発し、太平洋岸側を作戦地域とし、そこからすべての敵国人（日本人）を退去させることを決めたからであった。ルーズベルト大統領は2月19日に大統領命令9066に署名し、陸軍長官とその被指名者に強制移動を実行するよう権限を与えた。西ヨーロッパ作戦地域の司令官であるディウィット将軍もその実行のため権限を与えられた。3月2日、ディウィットは西海岸の西半分とアリゾナの南半分を強制立退き区域とした。ディウィットの命令後内陸へ移動した者もわずかにいたが、多くは区域内に残り、プヤラブやマンザナールの収容所へ移された。

強制移動のうわさが広まると（後で実際の命令が発せられた）、リビングストンとクレシイの日本人の人口は増えた。それは真珠湾攻撃後、すぐに学校から帰省した者もいたし、次の学期に出席してから戻ってきた者もいた。ハリー・ナカ、マキ・オオクボ・ハマダと彼女の夫のホーレス、マサオ・ホシノ、アキコ・ホシノ、そして別なところに住んでいた他の年配の2世たちも戻ってきた。この時期に4カップルが結婚した。共同体は友達や親戚に加えて3月2日にディウィットが強制立退区域とした所から内陸へ移動した数名の人々も来村して悩んでいたのであった。

リビングストンはディウィットが最初に指定した区域から外れており、初めの数週間は移動させられないのではないかとのように思われていた。しかし3月27日、ディウィットは日本人が内陸部へ移動するのを禁じ、住んでいる場所に留まるよう命令を出した。そして1942年4月30日最後の強制移動命令が出され、西海岸のすべての日本人が収容所に集められ、強制収容所に送られることとなり、そのキャンプの準備が終った後、戦時の強制収容所の民間による行政機関（WRA）から軍部による戦時統制担当行政機関（WCCA）の監視下におかれ、5月13日までに移動するよう決定された。

リビングストンとクレシイの日本人は強制移動命令に直面したのであるが、町の人々からは公けに助けを得ることは出来ず、また個人からも殆んど助けを得ることはできなかった。しかし共同体が移動の準備を始め、メルセド郡のカーニバル（収穫祭）をする場所に急遽建てられた収容所にどうしても行かざるを得なくなってから、コロニーの力が出現したのである。つまり、コーカサス人達との交際の結果何人かのコーカサス人の助人が協力してくれたので、コロニーの統一性と組織力を発揮することができた。しかし、同時にコロニーに対する攻撃は監禁前も監禁中も公然と行なわれたのであった。

真珠湾攻撃の頃、リビングストンの日本人はヤマトコロニーとクレシイコロニーに分かれていたが、共に密接な関係下にある共同体であった。最初に大和コロニーを区切った境界の内側とその周辺には59戸、隣のクレシイには39戸の家があった。以前より遙かに良くなった経済状態がこの2つのグループの距離を時間的にまた車によって随分縮めてはいたが、それぞれの開拓者達は「リビングストン」の日本人、「クレシイ」の日本人という意識を持っていた。クレシイの人々はヤマトコロニーの教会のメンバーで、子供たちは決まって日曜学校に出席し、ボーイスカウトやバスケットチームに加わり、ヤマトコロニーの子供たちと一緒にリビングストン高校に行かされた。この2つの共同体は1つになって強制移動の問題に取り組み、クレシイの2世であるマサオ・ホシノが問題解決に大きな役割を果たすことになった。

戦争前の数年間の生活は経済的に明るいものであった。禁酒法も解除されると、ワイン市場も始まった。土地販売が盛んとなり、道路も舗装され、家々に電気が点り、生活を楽しむ余裕が持てるようになった。ある2世は1934年ヤマトコロニーに建てられた10室もあるハマグチの家を見て驚いたのを今でも覚えている。1935年から1940年にかけてほとんどのコロニーの家に電気が引かれた。日本に里帰りした日本人も数人いた。1930年代後半にトラクターもど

らんどん購人され、車も買い替えられた。2世の学生たちも勉強しながら働く必要もなくなり、学校の寮に入る者も出てきた。1940、1941年までに厳しい時代は終わったかのように思えた。

2世たちは自分たちの家族が戦争前までは経済的に楽に暮らしていたのを覚えているが、同時にコロニーに活気が少しなくなってきたのも見のがしてはいない。1世の指導者の殆んどがいなくなっていたからである。サトウとオクエは亡くなり、戦争の勃発の頃にソウキチ・タケムラとヨシタロウ・マエダは日本に帰ってしまっていた。例え彼等がいたとしても過去の1世の指導者達には殆んど何もできなかったのではなからうか。というのは彼らはアメリカ市民でもなく、英語も堪能ではなかった。多くの決定はまだ若い2世が自ら解決しなければならなかったのである。1919年生れのグループはちょうど大学を出たばかりであった。子供たちの大半は大学生かそれより下であった。彼等は自分たちのことを「純真」で「若かった」と回想する。

真珠湾攻撃後の日々、“どちらの味方か”という問題が静かに、または公然と押し寄せてきた。この問題は攻撃があった翌日、子供達が学校へ行った時、その1人が聞かれぞっとしたものであった。共同体が直接行なった答えは明らかに忠誠心を誓うものであった。リビングストーンクロニクルで誰だか解らないが、ある2世が共同体は進んでアメリカを助け、また未だ帰化を認めようとしない法律のためにアメリカ市民になることができない親達を、2世である子供たちは信じているのだと断言した事柄が取り上げられていた。翌年の1月になると2世達は応急手当の授業を受けたり、地域の野戦救助隊に加わったり、また赤十字のために貯金をしたりして、自分達の忠誠心や協力を示し続けた。

数ヶ月もたたないうちに戦争に対する興奮は、リビングストンの日本人に影響をし始めた。1942年1月5日の命令ですべての敵国人は短波用受信機、ラジオ送信機、ある種のカメラが没収されることになった。パニックが高まってくると、日本人は銃やカメラ、家宝の刀を埋めたり、売ったり、警察へ渡したりした。先に起った多勢の逮捕者のことを気にしたり、忠誠を誓っていないということで非難され、罪を負わされそうなものを壊したり、隠したりした。ある1世の母親は、LFGAの運営者であるコンノが話す予定であった教会での集会のことを覚えていた。彼は他の共別体の状況について調べるため出かけていた。その集りでは、誰が逮捕されたのだろうか、何のために当局はどんなことに文句をつけるのか等々、教会は人々で一杯になり、大人たちは彼の話聞くために夜遅くまで残った。彼女の子供たちは自分達だけで家に帰った。彼女等夫婦が遅くなってから帰ってくると、煙があがっているのが見えた。組合の記録書、日本の写真、刺身包丁、日本の歌集等が燃やされていた。この集会のことを覚えていない者もいたが、似たような事が繰り返されていた。ある2世は“リビングストンの誰もが同じ頃に燃やし、完全に燃えるのに1週間もかかった”と云っていた。中には決して戻ることのないものもあった。殆んどの家では日本語で書かれた総てのものを燃した。スズキさんでは厚い辞書や、夫人の日記の全部が一週間いぶり続けた。写真もまた炎の中で消えていった。ブリキのかんに押し込まれた写真と一緒に家宝の刀も農場や庭に深く埋められた。殆んどのは二度と戻ってこなかった。剣道の道具は特に危険だと思われた。ある2世は竹刀と胴を風呂釜で燃やそうとした。胴には火さえつかなかった。“本当に固い皮だった。どうしても燃えなかった。全くひどかった。燃やそうと何度もつづいた。”

「パニック」はこの不安の時代を表わすのにしばしば使われることばであるが、最年長の2世達は組織化に対する活動を始めた。1月20日に彼等は集まった。5日後に2世たちは（マサオ・ホジノを中心として団結し）、メルセドで外国人登録の要求を果たそうとする親達を援助した。またJACLのサンフランシスコの事務所から情報を求めたが、情報は得られなかった

ので、他の2世グループのフレズノ忠誠同盟に問い合わせた。アメリカ忠誠同盟（ALL）の支部が1月27日に設立された。マサオ・ホシノとハリー・ナカを通じて、共同体はフレズノのALL支部と連絡を取り続けたのであった。

強制移動の不安が高まってくると、特に農場について心配になってきた。リビングストンは3月にはまだ強制禁止区域外にあったが、結局立ち退きになることは避けられないとみていた。その問題について集会が開かれ討論が行われた。マサオ・ホシノが議長に指名された。3月9日にホシノの他数名が事業を一緒に行うためにコルテーズのグループに会って話し合った。そこで考えられた1つの方法として農場を貸すことが良いということになった。この時点ではまだ内陸へ行って土地を借り、農場を営むことは可能であるとみられていた。マリポサの丘陵地帯は軍用制限区域のはるか外にあるというのでホシノはその状況を調べるためにジェルセイビルへその月のうちに出かけた。

3月末になると、ディウィットは内陸部移動の禁止命令を出したので、日本人のリビングストン退去は避けられないものとなった。コロニーには退去のための準備に10日も残されていなかった。クレシイでは2家族（インズとタナカ）が土地を売った。ブンサク・ノダはコロラドへ行った。残りの人々は立ち退きの準備を始めた。1世たちは自分の子供に頼り、2世達の中には高校のスポーツクラブのコーチで、ボーイスカウトのリーダーをしているカーペンターのところへ頼っていく者も数人いた。他の2世達は友達同志で助け合い、信用できる仕事上の関係者と一緒に準備を行なった。⁽²³⁾ 土地の問題は直ちに共同体の問題とされ、2つの組合の協力と力、そして外部の関係者との接触の結果、自分達を守る手段を見出した。リビングストンの2世たちはカリフォルニア果実取引所（リビングストン果実取引所が所属し、カリフォルニア州に跨っていた協同組合）の代表者ロディのディブ・リッチとパンフィック果実取引所（果実栽培者組合が所属していた）のピータ・マックローリンに会った。コルテーズの2世たちは法律のことで世話になったことのあるメルセドの弁護士ヒュー・グリスウォルドに相談した。リビングストンの2つの組合のメンバーとコルテーズの組合のメンバーがクレシイのニシハラの家集まった。夜間外出禁止令が出され、5マイル以上の外出は禁止されたので、ニシハラの家はリビングストンとコルテーズの日本人にとって法的境界内の唯一の場所となった。

その話し合の結果、3協同組合の協力によってリッチ、マックローリン、グリスウォルドの3人が共同で農場を管理することになった。クレシイ、コルテーズ、ヤマトのコロニーの全体の農地と農場収入が管理者を見つけるのに役立ったのである。保管者の代表であるグリスウォルドはこの適切な候補者としてのG.A. モンベルグに連絡をとった。当時モンベルグは不況時に抵当物の取戻し権を失なった土地を取り扱っていたアメリカ銀行の課の1つであるカリフォルニアランドコーポレーションに雇われていた。彼は以前フレズノの運営を行ったことがあり、銀行とのつながりが深いということで、十分な経験の持主であった。戦前の経済の上昇の結果、銀行の大部分の土地が既に売られており、彼も新しい仕事にとりかかったところであった。

モンベルグは1942年4月12日に採用となった。彼はすぐに資金を調達しなければならない仕事にまず直面した。約7,500エーカーの果樹畑と、コルテーズのいちごの収穫が間近に迫っていて、リビングストンやクレシイも同様であったから、約150の農場についての財政記録を整理するため新しい会計機材を購入する必要があるからである。幸にもアメリカ銀行が必要な資金を貸し出してくれたので、収穫には何とか間にあった。

リビングストン、クレシイ、コルテーズの大半の農場経営者は自分たちの土地をモンベルグの管理に任せた。彼との契約は月給であるが、総収益の1%と全農場からの純収入の3%が支

払われることになった。人々はこれらの3人の保管人に代理委任権を渡し、アドバイザーとして手伝える地元の人を5人依頼した。ゴールドン・ウィントン (リビングストン), ジョー・ウォルフ (メルセド灌漑地域の監督者), サイル・ストリンジャー (リビングストン), クラウド・アダムス (グリスワールド法律事務所社員), そしてダラス・バッチ (殺虫剤会社を持っているデリーの農場経営者) であった。⁽²⁴⁾

モンベルグは4月20日からその仕事を引き受け、リビングストン果実取引所の事務所に本部を設け、簿記係にウィルマ・アーノルド, 事務員にベシー・オースチンを採用した。彼は全体の管理者であって、総ての農場は別々に運営された。運営費は個々の所有者が負い、確実に入ってくる利益は個人のものとなった。土地の約5分の1をモンベルグの雇用者が耕作し、残りの土地は作物と土地の管理を確実にするという条件付きで分益小作の形態をとる借地契約を結んで貸し出された。

人々は農場の管理のことで忙がしかったが、家と家財などをどうするかという問題もあった。前者の問題は後者のよりも簡単に解決された。というのは農場管理を決める条件は法的なものであったからである。しかし、この問題はベシー・オースチンの個人的な配慮で解決した。しかし個々の準備を手伝ってくれた者は僅かしかいなかった。ある2世は名をあげながら次のように語った。“……彼らだからわざわざ手伝いに来てくれたんだけど、少し憶病の様な気がしたよ。リビングストンの人は誰も日本人を守るなどしなかった。恐らく個人的にはしたのであろうが、町としての声明はなかったのだ……。”

あと2週間足らずで出なければならず、荷造りをしたり、物置にしまい込んだり、できるだけ処分しなければならなかった。町の新聞には抗議の手紙ものらず、教会もその他の団体も手伝ってくれなかった。1世や2世たちは知人に家を貸したり、モンベルグの管理の下で土地を借りることになっている人々のために家を明け渡した。また鍋や衣類を積み重ねたり、所持品を狭い部屋や物置きに運び込んで、壊れそうなドアに簡単に錠をかけたりした。また家具を近所の家に貸したり、自分の責任で特別に国の倉庫に保管してもらおう者もいた。買ったばかりのポンティアックや電気ストーブ等はどうにもならなく売りに出した。

緊張と困難の中でさらに悩まねばならぬことが被さってきた。日本人は夜間外出禁止令によって午後8時から午前6時まで家にいなければならなかった。もしこれに従わなければ、1年間の監禁か5,000ドルの罰金かまたは両方共に課せられるというのであった。応急手段として指名された監視官は毎晩日本人の家が並んでいる道路を見回り、家の窓にライトを照らしていた。夜になると泥棒が出た。夜間外出禁止のチェックの後、不思議にも品物が時々なくなっているのに気がついた。夜間外出禁止令で家にいなければならなかったが、ある人は戸外で誰かが家々を駆回り、何か盗んでいたのを見たと言う。マサオ・ホシノがFBIに調べられ、そしてホレース・ハマダが尾行され、急に質問された。彼はクレシイのある1世がWCCAから要求された農場記録を準備するのを手伝い、ある晩遅く車を運転して家に帰って来たところであった。4月23日、セイイチロウ・タカハシが逮捕された。彼の家族は彼が剣道と日本学校の活発な活動、資金集め、そして他の活動等のために捕えられたと思っていた。一家はすでに彼の荷造りを済ませていた。(タカハシはノースダコタの仮収容所に送られた。彼の家族はメルセドの弁護士を雇い、コロラドへ一緒に行くために何とか釈放してもらい、そして一家はメルセドからコロラドへ移っていった。)

出発の日が近づくと、混乱も生じてきたが共同体は団結していた。4月19日、人々はさよならを言うために教会に集まった。4日後強制移動命令が発せられた。日本人医師がすべての人々にチフスと天然痘の予防注射をした。2世たちは教会に集り、一緒になって最後の礼拝を

行なった。1942年5月7日、最後の強制移動命令が発せられ、コロニーの日本人は13日まで家に居なければならなくなった。リビングストンクロニクルにあるALLのメンバーが共同体の協力を保証すると述べとり上げられた。共同体の人々は1世も2世もALLという頭文字(“American Loyalty League of Livingston, California. (カリフォルニア, リビングストン, アメリカ忠誠同盟) 偉大なアメリカのよきアメリカ人のために”)の下に請願のサインをして、皆と一緒にいられるよう次のような要求をした。

関係当事者殿

カリフォルニアのリビングストンとその周辺に居住する我々署名者日本人の子孫であるアメリカ市民は、連邦政府が軍の命令によって当然起こり得る現住地からの移動について慎重に考えていることを十分承知しているが、我々署名者はこの請願書により、合衆国の拡大せざるを得ぬ国防に対して忠誠と献身を十分に証明する立ち退きを実施するため、当局の決定せる総てのあらゆる立法措置に対し進んで協力し従うことを立証するものである。

リビングストンの日本人共同体は100%完全なキリスト教共同体としてのすばらしい身分を長い間享受してきた。

我々農業者の95%は農場を所有しかつ経営し、よく法律を守る市民としてこの地域で暮し、何年間にもわたって記録に止めてきた。

我々は戦争への協力のため必要欠くべからざる農産物の生産を続行するために、農場の運営を信頼できる管理者に委託するものである。

戦争中におけるこのような管理者の効果的な運営によって、終戦と同時に我々は帰宅し、平常の日常生活を再び続けられるよう望むものである。

リビングストンの日本人共同体は関係者同士お互いに助け合い、理想を追求しつつ、家庭的な共同体の団結を享受してきた。

我々はこの請願書により出来得る限り、そして連邦政府の規定と一致せざることはない限り、我々署名者リビングストンとその周辺の者は、我々を管理する何処の居留地のプログラムに於ても、友好関係の我々共同体が維持されるよう一つの単位として居住し、活動できるよう当局に請願するものである。

キャンプに入る前夜、日本人の多くは家具さえ1つもない部屋で過ごした。“わが家で最後に過ごした夜は、今までの中で一番奇妙なものだった。全部片付けられて何もないということは解るでしょう。ベッドすらなかったから床に寝たんです。空っぽになった家というのは本当に寂しいものです。解るでしょう。何もない家というのは。”⁽²⁶⁾

日本人は捕虜として収容所へ入れられた。前もってそれぞれの家から1名がメルセドにある在郷軍人記念館で登録をすませ、荷物に貼る家族番号と許された品物のリストを受取っていた。寝具類とリンネル製品(マットレスは含まない)、洗面道具、着替、食器、「基本的な身の回り品」など、総て一家族が運び得る荷物は制限されていた。記憶は曖昧であった。強制移動の日は何処に集まったのか、どのようにして収容所に入っていたのか、近所の人の車に乗せてもらったという者もいれば、連れていってくれるバスを(教会か果実取引所で)待っていたと答える2世もいる。先づ彼らはメルセドの中央ホールに集まり、そこから収容所へバスで移った。バスに乗っている途中、ヒガン医師は皆に話しかけ、“おとなしくしていなさい”と云った。収容所に着くと、禁制品(銃、懐中電灯、アルコール類、カメラ)を持っていないか調べられ、有刺鉄線で囲まれた構内へと入っていった。警察官が入口の総てに立っており、武装した見張り人が構内の角の監視塔に配置されていた。探照灯が夜になると点された。

メルセドの収容所に入ると、規制と屈辱と自由が奇妙にも混同した生活が始まった。彼等の

捕虜時代を忘れ得ぬものとさせる屈辱は、しばしば肉体的なことであった。

収容所は11日間で建てられたもので、メルセド、スタニスラス、フンボルト、サクラメント、ナパ、ヨロの都市と、サンフランシスコ市を含む7郡から約4,500人の日本人を収容する予定であった。いくつもの区に分けられ、各々は約500人からなり、自分たちの集会所とトイレ設備を持っていた。一般に共同体同士固まり、リビングストーンやクレシイの日本人のように多くは1つの区の中で一緒に生活を送った。

コロニーの日本人はA区を割当てられた。バラックは幅20フィート、長さ120フィートあり、5つ乃至6つの小さな部屋に分けられていた。特に大家族である人たちの中には2つ部屋を割当てられた者も数名いたが、ほとんどは1つしか与えられなかった。ある2世の女性は自分たち家族に割当てられた部屋が、ベッドの代わりに使われた粗布で出来た簡易寝台で一杯になったのを覚えている。当時、彼女は6大家族で6つの寝台だけで20フィート四方の部屋は全く余裕がなくなっていた。

建物は大変混んでいただけではなく、建てられた速さから想像できるようにとても粗末であった。床は凸凹なコンクリートから出来ており、雨にさらされた時には半インチほどあちらこちらに穴があいた。たるきと骨組はツーバイフォー、壁はタール紙でおおわれ、ワンバイトツェルヴで作られていた。風通しをよくするため、天井は除かれており、壁の上の空間をつなげるとバラックすべての長さの分だけ空いていた。“このバラックはこちらからあちらまで、幅はただ普通の屋根裏部屋の広さしかなかった。そして勿論何でも聞こえ、秘密なんか持つこともできなかった。ひどい状態だったが、ある意味では面白いところもあった。つまり向こうの端に向かって『今何をしている』などと大声で聞くことも出来た。⁽²⁷⁾ ある女性は風邪をひいた時のことを覚えている。自分の咳でみんなを起こすのではないかと気にして毎晩何度も起きて建物から出ていった”と語ってくれた。

リビングストーン、クレシイの日本人はこのような状態の中で次の様な必要最小限の困難さについて、はっきりと覚えている。食事、入浴、睡眠に苦勞した。中央のシャワー室にはすべてのシャワーに対して1つの温度調節のつまみしかなく、これが調子よく動かないので温水は大低冷たすぎるか熱すぎるかで、シャワーを浴びるときに紐を引っぱったが放すと水は止まるので、紐を長くして、足の裏で押えながらシャワーを浴びた。

トイレは屋外にあって、1つの区には1組しかなかった。トイレの長い便器には4人から6人の人が座ることができ、便器の下には蓋のない桶があり、トイレの外には大きな尿溜のタンクが錘と釣合うようになっていた。尿が一杯になって錘より重くなると、タンクは急にひっくり返り、尿は桶の中へと流れていった。たまたまタンクの汚水が流れ出た時に一番近くに坐っていた者は、不幸にも汚水が懸かった。トイレの汚水が流れ出る時、これを調節した者は誰もいなかった。プライバシーもなく1世の女性にとっては特に面倒なことであった。

食事は中央の食堂でとり、1日あたり約25セントの軍用食であった。料理は最初、毎日きちんと決められたメニューについてくわしく書かれている軍隊の料理の本に従って作られ、缶詰食品に頼る傾向があり、日本人の好みには合わなかった（後になると新鮮な野菜や果物がより配給されるようになった）。食糧についての記憶はそれぞれ違うが、ある一家では味が余りひどいので自分達のは自分で作った。彼らはクレシイの店の経営者に注文を出し、配達してもらい、食料品を確保していた。ここでの食物に我慢できたという者もいるが、ある主婦は“犬にやる餌のようだった。違ったものが一緒になってごたごたにつぶれていて、全部がきたなくなっていた”と。

夏の暑さは予想した通り我慢できない程であったが、春は春で雨が降ると粘土を多く含む泥

がべっちゃべっちゃんになって、皆なが食堂へ行ってバラックへ戻ってくると、靴に粘土がついて重くなってきちんと歩くことが出来なくなった。麻布の覆いに粘土が付きにくいのを発見すると、人々は足の回りに麻布を袋状にまいて粘土よけにした。

収容所での思い出の多くは、生活の仕方にあった。日本人は特別の許可なしではここから外出することが出来なかった。彼らが受け取ったどの様な荷物でも、当局の前で開けなければならなかった。ここを訪ねて来た者は決められた時間内に、指定された場所へ行かなければならなかった。人々が読む新聞はガリ版で刷られたものに限られたが、それも検閲された。最終版の表紙に作った囲いと監視塔のイラストは禁止された。しかし、収容所での生活は捕虜の生活であったが、町の生活とは余り変わりがなかった。彼等は受身にはなっていなかった。制限されてはいたが、自分達のことは自分達で解決していた。

収容所はこの監督者が管理していた。最初の監督者はディン・ミラーであるが、後でハリー・ブラックに変わった。管理の仕事は、行政、公共事業（消防署を含む）、配給調達、営繕、サービス（教育とレクリエーションを含む）、売店、保安の8つに分れていた。それぞれの部ではコーカサス人が先頭に立っていたが彼らの下には日本人が配置され、他の日本人も同じような仕事に従事していた。日本人の医師と看護婦は病院代わりに作られた診療所の職員として働くことになった。規則違反の取締り係りの人は、P (Police) という緑の腕章をつけていたので「グリーンピース」と呼ばれていた。その他に消防員、教師、秘書、皿洗い人、調理人などがおり、1ヶ月8ドルから16ドルの僅かばかりの賃金で働いていた。もちろん「まかない付貸し間」がついていた。

日本人はまもなく収容所の運営と改善に積極的に関わるようになった。家族が来る以前から働き始めている者もいた。マサオ・ホンノは移動段階で手伝っており、ノーマン・サトウは1週間前から仲間たちと一緒に来て、調理室を作った。収容所に来ると日本人はすぐにレクリエーション、教育、宗教に関する予定を立てた。収容所の新聞であるメルセディアン⁽²⁸⁾の初版は1942年6月9日に発行された。約2週間後、バンドが形成され、毎週ダンスパーティーが開かれた。礼拝が行われ（プロテスタント、安息日再臨派、カトリック、仏教）、日曜学校も始まった（カズオ・マスダがまた指導者となった）。メイム・キンはコーラスバンドを作り、マーサ・タケムラは保育学校を作る手助をした。レクリエーション同好会が始められた。これは共同体関係者にとって大事な要素であった。1世達は碁と将棋を楽しみ、2世達はボーイスカウト、相撲、そして何よりも野球チームを作って楽しんだ。それぞれのコロニーには各々のチームがあった。マサオ・ホンノは共同体のチームであるドジャースのコーチをまた引受けた。ある2世は昼も夜も野球をしていた覚えがあるという。コロニー同士のライバル意識は強かった。“なぐり合い寸前までいったことが数回あった”という。

収容所へ入るとまもなく、日本人は再び限られてはいたが自治らしいものを始めた。6月23日、各区から男性1名、女性1名の2名の代表者を選ぶために選挙が公示された。選挙権は18才以上の者で、英語を話し書くことの出来る者に与えられた（1世はWCCAの規定によって役員や有権者から除外された）。2日後選挙はWCCAによって取消されたが、後に再び行われ、集会が予定通り始められた。⁽²⁸⁾ 代表者は集会の日には必ず収容所の監督者に会い、人々の事を報告し、当局からの通知と命令を伝達した。ユキ・タナカとマサオ・ホンノが代表に選ばれた。彼らはいわばリビングストン・クレシイA区の区長であった。

捕虜達は収容所の生活総てにおいて積極的であった。他の日本人数千人と共に監視されていたリビングストン、クレシイの開拓者達はやがてその共同体という範囲を越えて活動していた。家族達は一緒に仕事や食事をしなくなった。1世も2世も農家以外の生活に引きつけられ

た。つまり他の人々と一緒に仕事をするために、また他の仕事のために1部屋の家を出て、農業者としてではなく、皿洗い人、料理人、事務員として働き、また礼拝、食事、スポーツなども他の人々と一緒に行くようになり、合同の投票もした。かつて共同体の中心であった協同組合、教会、青年団などの組織に、他の多くの共同体から参加者が増え拡大したので、組合がそうであったように、日常の些細なことは問題にならなくなってきた。

セレモニーでさえ共同体の範囲を越えて広がった。ノーマン・サトウとマーガレット・ミウラの結婚式は収容所で行われた最初のものだった。2人の結婚を皆に知らせると、約200人の人々がお祝いに集まったが、その多くは2人の知らない人達であった。メルセド長老教会のハーベイ牧師が式を行い、2人は外のケーキ屋から取り寄せたケーキにナイフを入れた。ノーマンが“ブロードウェーのハネームン”と言ったように2人は当局の職員が住んでいた地区「ブロードウェー」のバラックで新婚生活を始めた。

日本人はこのメルセドの収容所に約135日間いる予定であったが、5月31日までに収容所は満員になっていた。そこで次に収容されるコロラドの収容所のこと7月に“メルセディアン”に発表された。コロラド州グラナダのアマシエ収容所への移動が1942年8月31日に始まった。この移動はコロニー社会の終りを感じさせるものであった。戦争は隣人、親子を引き離し、共同体の生活を終りにさせるものとなった。

X 分散と帰郷 1942年9月—1945年12月

アマシエに着いてから1年もたたないうちに、リビングストン、クレシイの共同体では、若い人達が大学、徴兵、収容所外の仕事に出て行き、人口が減った。戦争の終る頃には老人と子供しか残っていなかった。この移動・分散は辛いものであったが、一面新しいチャンスをもたらしたのである。戦争の終る頃までには、2世達は彼等自身を取り囲んでいた以前の偏見の壁の中から第一歩を踏み出した。アメリカの将来に自分達を託しながら、設立者の夢を再認識し、その完成へと最後の基礎固めをしたのである。

アマシエの強制収容所は西部と中西部の荒れ果てた場所に建てられ、陸軍管理局（WRA）の下に置かれた10の収容所の1つであった。最も大きい収容所であるポストンはアリゾナに位置し、20,000人を収容する設備を持っていた。アマシエは最も小さく、コロラド州南東部のグラナダの町（魚市場とドラッグストアしかない200人たらずの町）の近くに、8,000人を収容するように建てられた。アーカンサス川を見下ろせるアマシエはメルセド収容所（主に農村の日本人）とサンタアニタ収容所（凡んどロスアンゼルスに住んでいた都市の日本人）の人々を収容することになっていた。収容所が建てられる以前でも建てられた後でも、ここは変わりがなく、カメヤガラガラヘビやさそりがいるところであった。

メルセド収容所からアマシエ収容所への移動は、最初、1942年8月25日に200人の働き手がメルセドを出発し、大多数は日に600人余の割合で移動することにして、9月1日から始まった。リビングストン、クレシイの殆んどの人々は9月15日火曜日にサンタフェ鉄道で出発した。フレズノ、モヤベ、ニードルズ、フラッグスタフ、アルバーケルク、トリニダード、ラジュンタを經由して、51時後にグラナダへ着くことになっていた。実際には約60時間かかり、それは「悲惨」なものであった。急に何千人という人々を運ぶために、政府は古くて汚ない列車を用意させたのだった。寝台もなく、有蓋貨車のような19世紀の客車や、寝台は付いていたが使わせてもらえないものであった。南京虫が座席のカバーから出てきた。前に乗った人々が食べた残りのご飯が床中にこぼれていた。日の出から日没まで黒いカーテンが隙間もなく閉められていた。ある2世は次のように語った。“おそらく何かを通る時に列車は転轍され

たのであろう。最初の夜、バルスト近くの砂漠で列車が行ったり来たりしていたのを覚えている。その晩に砂漠に入ったから、もちろん翌朝にはアリゾナに着いていると思うだろう。けどまだ砂漠の真ん中において進んだりもどったりしていたんだ。⁽²⁹⁾ 動いたり、止まったり、揺れがひどく、運転手がこの収容所送りをもっと苦しいものにしようとしていたと思われていた。”

アマシェ収容所はメルセドの収容所より長く使われることになっていて、大きく、設備も整えられることになっていた。リビングストーン、クレシイの人々は早く来たほうであり、まだ建設中であったので、メルセドより状態が悪いと思った。進んで仕事仲間と早くに来ていたある者が、シャワーを浴びようとしたら、泥と油の混ざった水が出てきた。彼より1週間後に着いた時には、まだ温水の設備は完成せず、井戸もいくつかはまだ使えなかった。食堂は半分だけしか使うことができなかった。バラックの床はモルタルもなしに直接地面にレンガが敷かれることになっていたが、その大半は未完成で、地面の上で暮らした。ここに早く来て1つだけ有利だったことは、キャンプの回りを囲うために積み重ねてあった材木が手に入ることであった。

“キャンプについて覚えていることの1つはみんなが泥棒だったということですよね。私達が着いた最初の夜、殆んどの人が暗い中をこそこそと材木を取ってバラックへ運んで行った。それでテーブルや椅子を作ったり、またすばらしい物もいくつか作った。でもただ驚きだった。ちょうど蟻の群れが砂糖に群がっているかのようなようだったから、山ほど積まれていた材木が一夜のうちに消えてしまったんだから。”⁽³⁰⁾

メルセドの収容所と同様に、アマシェも食堂を中心に建てられたバラックで出来ていて、いくつかのブロックに分けられていた。リビングストーン、クレシイのグループは比較的小さなグループで、ブロック9Hと10Hの4分の1を割当てられた。そこはキャンプで一番高い丘陵地のさらに高いところにあった。ある2世によるとロスアンゼルスの人達はリビングストーンの人達を「うすぎたない奴」だなあと思って、ここを「似非紳士の丘」(Snob Hill)と呼んだ(2世曰く、我々はもっと節度があった)と。

アマシェの生活は多くの点でメルセドの生活の続きで、その状態はみじめであった。バラックはただ寒さ防けのためにあるにすぎなかった。彼等のプライバシーは前よりも守ることが出来たものの、部屋は狭かった。7人までの家族は1部屋しか割当てられず、部屋には古い丸型のストーブ、折畳み式寝台、マットレス、掛蒲団、石炭を運ぶためのバケツしかついていなかった。しばしば砂嵐が起こったので食事に砂がつき、口あたりが悪く食べられるものではなかった。コーカサス人の給仕長の下で、働いていた給仕のノーマン・サトウは最初軍隊の献立表を使い軍用食を作っていたが、皆がこの食事に対して反乱を起こすのではないかと心配し始めた。いつも食事の後、それぞれの食堂の60ガロンのゴミバケツは食べ残した物で一杯になっていた。やがて食事は改善されたが、“毎日、毎日”片面しか焼けてないトースト、粉ミルク、粉末玉子、白身魚の塩づけが出た。

アマシェはメルセド収容所よりは進んでいて、有刺鉄線で囲まれていたが、学校(保育学校から生徒数600人の高校まで)、郵便局、外科手術に備えた150床のある病院があり、新聞も数種類発行されていた。礼拝は週に1回行われ、数人の牧師が順番に行なった。各ブロックから代表1名が出て構成されている全体会議で、収容所の局長ジェイムス・リンドレーや他の管理者と定期的に会っていた。

収容所(Assembly Center)と強制収容所(Relocation Camp)の決定的な違いはその名前に表されていた。アマシェは強制収容所で、ある程度の自由が認められており、最後には出て

行くことが許された。収容所での生活を嫌って、2世たちは早くもそのチャンスを見つけていた。それはここに来て1週間もたたないうちに、リビングストン・クレシイグループの多くの人々は作業休暇を理由にここを出ていった。戦時中の労働不足のために農業者は農業労働者としてWRAキャンプに行くことができた。コロニーの2世たちはじゃがいもの収穫の仕事や、ビートの葉を切り落とす仕事を見つけたりした。なかには休暇の延期を求め、次の仕事からまた次の仕事へと回っている者もいた。ある人は最初ビート畑で働き、それからデンバーへ行ってホテルやレストランで働いた。またアイオアの農場で働いた者もいた。

時間がたつにつれて、さらに多くの2世たちが安定した仕事を見つける機会を持つようになった。結婚して子供も1人いるある人は収容所には1年としないと断言していたが、他の多くの人々と同じようにWRAの助けをかりて、やっとオハイオに仕事をみつけることができた。他のコロニーの2世たちも、ただこの地を去りたい一心で、シカゴ、ニューヨーク、ボストンや中西部の州で、図書館員、教師、販売員、コックとして働いた。なかには農地を個人的にまたはグループで借りたり、買ったりしてチャンスを作った者もいた。ミナベ一族のうち3人がキャンプから2マイル離れたアーカンサス川の辺でビート、家畜用・食用のとうもろこし、ピクルス用のきゅうりの栽培を行なった。ノーマン・キン、サム・マエダ、ユリ夫妻と子供のロイド・カズオ・タカハン、シュート・タカハン、ジョン・コンノ等はお金を貯め、ユタ州境のコロラドのグランドジャンクションに農場を買った。彼らは戦後はそこにいるつもりはなかったが、2・3年、市場向け野菜を栽培する計画であった。ノーマンは簿記係、サムは総支配人であり、労働者は時としてアマシエの友達からなっていた。

年配の2世たちと同様に、リビングストン・クレシイコロニーの若い方の2世たちも可成早く収容所を出ていった。将来の職業に対する見込みは薄かったが、多くの人たちはアマシエには2・3ヶ月しかいないで、勉強するため出ていった。これには共同体、教会が保証人になり、米学生収容所評議会の援助で、ブリハム ヤング、オーバリン、サン オラフ カレッジ、メリーランド、パーソンズ、ウェスレヤンなどの大学に入学した。

結局2世たちを親元から離れたのは戦争であった。1943年2月、政府は議論的となった忠誠調査を行なった。1世も2世も軍隊に志願するかどうか求められた。また同時にアメリカ合衆国に対して「絶対的な忠誠」を誓うかどうか聞かれ、「天皇陛下や外国に対してはどんな形でも忠誠を誓わないこと」を約束した。“No”と答えた者は他から離されてツールレーキ収容所へ送られた。コロニーの1世や2世も“No”と答えた者は1人もいなかった。日本人への徴兵義務が1944年1月に公布され、共同体の2世たちもその義務から避けられなくなった。コロニーの多くの2世たちが徴兵され、またアマシエ、大学、都市や町から志願した者もいた。早くに志願したり徴兵に応じた者は、全員が2世からなる442戦闘部隊に配属され、ヨーロッパへ送られた。また情報局で日本語の集中講義を受けて、通訳としての準備訓練を行うことを選んだ者も数人いた。

2世達はリビングストンから離れて日々を送り、視野は広がったものの素朴さは失なわれた。彼らはアマシエで遊び好きな都会グループで自分たちとは徹底的に違ったロスアンゼルスの2世達（脅迫する者もなかにはいた）と親しくつき合うようになって、様々な経験をした。戦争が始まったばかりの数ヶ月間はニューヨークのゲットーの様に、ミネソタのスカンジナビア人共同体、ユタのモルモン集団、メインの地方都市、イタリア或いはフランス系等々の異質の文化のはざまの中で生き続けた。親しみやすく受入れやすい人にも会ったが、面と向かって敵意を示す人にも会った。彼らは新しい社会情況に直面して別の才能と手腕をのばした。グランドジャンクションの農業グループは土曜日の夜に度々町に出かけて食事をするために、レス

トランを注意深く探して、断われそうな上流の所には行かず、中流より僅か上の所を見つけていた。映画にはよく行ったが、彼等は次のように語っている。“映画館は本当にひどかった。耳をいつもふさいでいる有様だった。回りの連中は「ジャップがいる」と言っていた。いつも「ジャップ」と呼ばれていた。”⁽³¹⁾ そのグループの1人が町で水兵に顔を殴ぐられ叩き伏せられてから、彼らは町へ単独で行くのを止めた。

2世達がアメリカの各地や外国へ行っている間、1世達の殆んどは収容所の生活に落ち着きつつあった。彼らは家を恋しがっていたが、畑での長い労働から開放されると自分達の楽しみを見つけた。また食堂、図書館、パトロールの仕事が終ると、与えられた多くのカルチャー講座を自由に受けることができた。今日コロニーの家々で1世の男の人達が作ったオレンジを入れる竹籠ぐらいの厚さの板に彫った鳥や動物の飾り板が飾られている。女の人達は手芸を習ったり、なかには詩を書いたり歌を唄うことを始めた者もいて、戦争が終ってからも続いていた。

戦争が終る頃までにはリビングストン・クレシイ両共同体は本質的に別々になっていた。1世とその子供である2世の最年少者たちは一緒に9Hと10Hという近所同志で暮らしていたが、共同体としてのすべての活動や組織、共同体としての核心、自覚、阻隔などは消滅していた。コロニー組織体や教会の婦人団体の必要もなくなっていた。農業はもはや日常の仕事ではなくなり、週ごとや月ごとの仕事となっていた。毎年グリスワールドが不在の日本人に代わって納税用紙にサインをしていた。収穫期も終ると彼と管理委員会の1人がアマッシュに来て、10日から2週間ぐらい滞在していった。その間彼らは各々の家族と農場の記録について話し合い、次のシーズンの指示を受けたが、大部分はリビングストンで決定され、実施されていた。

1944年12月17日、戦時局は日本人に対する西海岸の移住禁止命令を1945年1月2日に取り消すことを発表した。これで総ての収容所が1945年末までに閉鎖されることになり、日本人も家に自由に帰れることとなった。⁽³²⁾

都市や地方の多くの日本人が借地や借家に住み、戦前の混乱で仕事を失なったり、戦争中のあくどい管理で農場を失なったりしたのとは違って、リビングストン・クレシイの人々には帰る家があった。彼らの農場や家はモンベルグが管理していたのだが、コロニーの家族は次の事を決定せねばならない時期にぶつかっていた。即ち、1世達は引退の年齢になっていたために決定するのは2世達になっていた。1世の「若い方」の1人であるイサジ・キリハラでも既に63才になっていた。親達は仕事への意欲と作業は出来たのではあるが、農場を維持するためには子供達が経営する段階に到達していた。その選択は土地を売るか、或は農場を経営するか、そして若し農場が小さく、2世が別の所で既にきちんとした仕事を持っているのなら、共同体に帰りたがっている親を財政的に支えるかどうかということを決めねばならなかった。

コロニーの2世の何人かにとっては、帰らないことは魅力的な選択であり、または必要な選択でもあった。コロニーで農場の管理者を探している時、モンベルグの組織に加わらなかった者の中には悪徳業者に頼んだ者も数人いて、不適切なまた不正な運営の結果、戻ることができない者もいた。農業が好きでない人は他の仕事を見つけた。カリフォルニアから離れて生活を送ることは人々に開放感をもたらしたので、結局コロラドに留まることを選んだ者のなかには、自分も家族も「いまいましいジャップ」のように扱われたことはないと言っていた。

農場へ簡単には戻れないということをはっきりしていた。カリフォルニアでは人種間の対立が起こるのではないかということから、日本人が戻ってくるのを組織を作って反対した。リビングストン、メルセド郡、そしてスタニスラス周辺の郡では戦争が終る前から日本人が戻ることについて反対が叫ばれていた。

1943年6月、リビングストン商工会議所の集会で、息子が乗っていた戦闘機が太平洋で墜落されたばかりである市議員のアーノルドは、商工会議所は日本人が如何なる時でもカリフォルニアに戻ってくることに反対であるという決議文を正式に提出した。リビングストンクロニクルの編集者であったアダムズによると、その動議は「全員一致」で通過され、当時日本人の土地所有権の問題と日本人の帰省があり得るかどうか調べていた州立法委員会へ送られたという。メルセドで委員会の尋問が行われた時、ベテセン（郡の調査官）、郡保安官であるコーネル、グリスワールド、モンベルク、アダムズなどが証明するため出席した。ほとんどの証人は報告し、中立的かまたは否定的な意見を述べた。クロニクルによると、日本人の帰省に好意的であったのはバリコスクール（コルテーズの子供たちが通っていた）の教師であるフローレンス・グリーンウ先生だけであったという。日本人がメルセド郡に戻ってくるのを認めることは危険であると前に述べられたいろいろな意見（その中にはコーネルのものもあった）に対する彼女の反抗は、ある委員（以前は海兵隊員だった）を狼狽させる程であったので、アダムズによると、その人は気を落ちつかすために席を離れたという。またこのことについてもう1つ話がある。グリーンウの証言に対してひどく非難した在郷軍人会のメンバーは、彼女を学校から追い出すと後で公表したという。

概して、日本人が戻ってくるかどうかということに対するリビングストンの反応は、クロニクルの編集者が述べたことと全く同じであった訳ではない。町の人々の多くはひどく反対していたが、なかにはそれとなく同情していた者もいた。1944年10月にリビングストンを訪れたある2世の手紙には当時のいろいろな状況について述べられている。

“9月28日、私は強制移動の日から始めてリビングストンに来て知り合いに会ったり、状況を見たりして、7日間ここで過ごした。

農場は……場所……の所を除けば全部とてもよく整備されているようです。……は手をぬいた仕事をやっています。最低限必要なことさえもなされていません。雑草はすき起しすらしていないので茫々と生い繁り、硫黄処理をしていないからあちこちの房に黴が付いている。この農場はリビングストンの話題になっている。……の評判はがた落ちである。

我々の「親愛なる編集者」と約1時間話しをした結果は大変に興味深いものでした。私は彼に我々の帰省についてどのように思っているかを尋ねたら、彼は典型的な政治家のように“態度ががらっと変わった。”彼は“憲法には戻ることができないなんて書いてない。暴力が起こらないよう取り計うことは、我々法を執行している者の義務であろう。”と述べた。彼は初めての停電の時、クレシイやコルテーズ周辺で見たサーチライトのことを話し続けた。総ての疑惑は我々にのしかかっているが、編集者の心の中に罪と自意識が広がっている様子が見られたのは個人的な楽しみでもあった。

我々にはベシーとマーク（オースティン）というすばらしい味方がいる。他人に話をしてはいないけど両者の契約の下に管理され、応諾された事実は、彼女が公正な立場を堅持した結果である。ブッド・ファリア〔リビングストン木材置場の支配人〕もよい味方で、いわゆる「ジャップに対する全会一致の決議」が通過した時の商工会議所での集会について、本当の話をしてくれた。予想していた通りにアーノルドがその決議案を持ち出した。多くのことは話されないで投票が行われたのであるが、実は投票した者も余りいなかったし、また反対した者も殆んどいなかった。多くは投票を拒否した。なぜ友達が我々に話そうとしないのかといえば、時機が悪いのであろう。話さないということは問題を起こしたくないということだから。ジョー・ロードリングス夫妻は我々が戻ったらすぐに再度会いたがっている。夫妻はこの問題の総てについて本当に怒っているのだが……。

モンベルグの管理下にある殆どどの農場と同じ様に、あなたの農場もきちんと整備されている。彼はいい人ですね。”⁽³³⁾

日本人が戻ってくることははっきりしてくると、クロニクルの編集者は反対を繰り返し始めた。彼は“リビングストンは他のところより問題は起きないだろうと予測はしているが、一方でリビングストンの世論は、戦前の隣人としての日本人に対して変わってきて、前より冷たくなっている”と述べていた。⁽³⁴⁾ アマシエでも日本人は同様の警告を受けていた。1945年1月にアマシエで開かれた最初の協同組合の集会は帰省の問題に関するものであった。議事録によるとダラス・パチェは日本人がカリフォルニアへもどることは“我々のすばらしい忍耐力と寛容さに一段と重荷を負わせることになる。戦争が始まってから状況が変わった。我々はカリフォルニアを以前のように戻すべきではない”⁽³⁵⁾と警告したと記されていた。帰郷した者が早くも悟ったように、彼の云ったことは現実的なものとなった。リビングストンへ帰るためには実際多くの問題に直面した。その最も基本的なものは家を借りていた者がまだ出ていないということであった。モンベルグは次の収穫期にそなえるため家も農場ももう1年間貸すことにしていた。すぐに農場を出て行きそうな者も僅かながらいたけれども、実際に自分の家に戻ることができたのは1945年の秋も終りか冬の始まる頃であった。

戦争が終らないうちに収容所を去っていた数少ない1世のうちのアンドウ夫妻は娘の1人を連れて、コネチカットから西海岸が開放された1945年の1月にクレシイに戻った。5月までには57名がリビングストン、クレシイ、コルテーズに戻っていた。

農場へ戻ることを選んだ日本人は勇気を持って行動した。というのはリビングストン周辺では彼らに対する悪感情がおおびらであったからであった。再びリビングストン高校へ最初に通い始めようとした2世は拒否された。アンドウによれば、コーカサス人の農業労働者は最初の1年は、日本人の仕事を断わったと。しかし、本当に危険だったことは生命に関わることであった。1945年2月1日、アンドウ家が銃撃された。春にはそれに続いて6回事件が続いた。アンドウ家がさらに2度、コルテーズの長老教会が1度（その時、ジョージ・モロフジとノブヒロ・カジオカがいた）、クレシイのスズキの貯水場が2度（モリモト・ボブ、テッドがそこで一時暮していた。）、そしてマサゾウ・キシの家が1度銃撃を受けた。⁽³⁶⁾ キシ家のは深夜に発砲されたもので、1発が居間のシャンデリアを壊し、最後の2発が床を突き抜け、発砲された3分の1が椅子にあたった。家にいた4人の家族は後ろの寝室で寝ていたため怪我をまぬがれた。キシの家をねらった後、同じ連中が車でクレシイへ来て、モリモトの家を銃撃した。ボブ・モリモトは彼らを車で追いかけたが、捕えることはできなかった。

このような無鉄砲な攻撃に危険を感じて、日本人はマットレスや米の袋や金属板で寝室に裏張りをはじめると同時に公式に保護を求めた。最後の銃撃事件の後、リビングストン・コルテーズ地区のアマシエ小委員会はWRA長官のダイロン・マイヤーに手紙を出し助けを求めた。司法省は特別調査官を派遣し、ミネソタ州のフォートスニリングで訓練中のフレッド・キシも家へもどるため14日間の休暇が与えられた。

調査が開始されると、司法省もハイウェイパトロールも特別の監視員を置くことはできず、またしないということが明らかになった。しかしその時保安官コーネルが監督局に現われて夜のパトロールのため2人の臨時監視員を雇う資金を要求した。1945年5月1日に開かれた公聴会で彼は次のように述べた。

“戦争によってもたらされた様々な状況のために、今日のこの状態の不安さを考えてみますと、現在の法律が施行されておりますが、どんな事故でも或は失望する様なことが起りますと、後にそれは損害の大きい高価なものになると私は確信するものであります。現在農場

にきちんとした夜警をおくことによって、（事件を）調べておかないと、メルセド郡にとって非常に危険な難しい損失の大きな事態へ発展するかもしれませんから、夜警をおくことによって現在の状況を早く止めることができるであります。”⁽³⁷⁾

コーネル、キン、プラナダから来た消防署長の3人は郡政執行者の前で次の様に証言した。消防署長は資金を割当ててなら少しプラナダの方へ回してほしいと求めた。前の年にプラナダでは連続して火事があり、その時、資金を求めたが断わられていた。郡政執行者のフランク・フィニイは保安官になぜ資金が必要なのか、“毎日銃撃はあるが、殺人はまだ起こっていないのではないかと”と言った。メルセドサンスターによると、フィニイは日本人自身がそうなるようにしたのではないかと主張したという。その新聞は次のように述べていた。“フィニイは日本人が再び来て慈しくはないのになぜ戻ってくるのかという問題を持ち出した。軍人のキンは委員会に対して、これは我々の家であり、他には行くところがないと説明した。フィニイはキンに対して、君たちが騒動を起こしているのだと言ったが、キンはこれは我々の家であると答えた。”

保安官の要求を断ろうとするフィニイの行動は過半数に満たなかったため失敗に終わったが、この問題をさらによく調べるために棚上げにされた。彼はまた議論を始め、“イエスともノウとも云えないが、銃撃されることに対して日本人の責任が全然ないと私には思われない”と述べた。保安官の要求を拒否するための提案が再び出されると、郡政執行官はそれを文句無しに通過させてしまった。

公聴会の結果として、日本人はさらに起こり得るかもしれない銃撃からの法的な保護はなくなってしまった。ストックトンからのWRA、リビングストン警察のギルバート、そして保安官のコーネルらによる調査ではその疑いすらも見出されなかった。幸いにもその事件には広く関心が寄せられたため攻撃はやんだ。

銃撃を受けたり、保護を受けることがなかったけれども、日本人はリビングストン、クレシイ、コルテーズに次々とどって来た。彼らの大半は汽車に揺られながら、1945年9月に最初の主要なリビングストン・クレシイグループ、10月の初めには次のグループが到着した。両者共サンタフェ鉄道経由でウィントンで合流し、サンホワンキーバレーを下った。リビングストン南部にいたアマチュエの他の引揚者も乗ってきた。

秋に戻ってきた大部分の人々はまだ自分達の家へ戻るができないので、友達の家へころがり込んだり、牧師館で寝泊りできない者はストックトンの軍隊からテント、皿、鍋を借りて教会の庭で生活をした。殆んどの人々がいた教会での暮しは共同生活であった。グループが自分たちで持っていた物といえば、キヨシ・オクエとハラタニ牧師が毎日買物に使う1台の車と皆がお金を出し合って買った料理の本しかなかった。献立を毎晩たて、女性達が食事を作り、テーブルに並ぶと交替で食べた。必然的に簡単なものであったが、色々と工夫されていた。個人的な関係を通じて、彼等はトラック1杯の米を買った。これは教会で生活している人々全員が食べるのに十分な量であり、後で自分達の家へ戻る時になっても全員に分けることができた。時々、トロックで魚を買い入れた。女性達はオリーブ通りで小さな西瓜が栽培されているのを見つけると漬け物にしたり、また子供達の学校帰りのおやつ用にさつまいも掘りをした。

11月頃には殆んどの日本人が自分の家へ戻っていたが、家の状態はひどいものであった。大半は家の中には何もなくて、破損したり、汚れていた。被害は個人にも共同体にも及んだ。カジ家では彼が何年も書記として働いていた頃につけていたコロニー協会の記録が凡て消失していた。また彼が注意深く誕生、死亡、結婚のことを記録したカレンダーもなくなっていた。

キモト家の壁には反日の落書きがあちらこちらに書かれていた。オクエ家では、一家の所有物をしまい込んで錠をかけた部屋がさびた2つのなべのふたを残して空っぽだった。コロニー中の家々が同じように何もなくなって汚れていた。

町では日本人は殆んど受け入れられなかった。リビングストーンやクレシイでは証拠がなかったり、多くの2世が軍隊で服役し、442部隊での戦闘記録があったにも拘らず、反逆者やスパイの日本人がここにいると思っていた人達が少なからずいた。アダムズはある2世に、真珠湾攻撃の後、数名の日本人が篝火の代わりにサーチライトを使ったという。その時の光はキャタピラトラクターのライトだとわかったのだけれどと話した。クレシイで店を営んでいる数名の日本人がポールに登って信号を送っていたとある2世に話していた。

リビングストーンやクレシイの友達の中には、中立を保ったり、優しくしてくれたり、また立退く前に預けた品物を返してくれたり、少なくとも同情して話しかけてくれた者はいたが、日本に対しての「敵国人」というレッテルはなかなかとれるものではなかった。町のベーカリー理髪店では2世2人が拒わられた（イモーゲン・フォスター・サイ夫人はその時抗議の手紙を出し、それがリビングストーンクロニクルで公表された）。⁽³⁸⁾ ずっと以前から協同組合の従業員であった者もたとえ2世が挨拶していても彼らを避けていたし、また退役軍人の組織の1つは2世の軍人を認めてはいなかった。ある一家では食料品を買うのに苦勞しており、その主婦は日本人に配給食料を売っていたトリグェイロス食料品店がひどく抗議を受けていたことを覚えていた。しかしトリグェイロス食料品店は店に人がいなくなるのを待ったり、また見られないように裏へ回って来るようにいって食物を売っていた。

冬の暗さと寒さの中で、日本人を冷静にさせたのは銃撃や破壊や町の不愉快さだけではなかった。悲しいことに亡くなった者も、コロニーを去って行った者もいた。3人の2世が戦争で亡くなった。442部隊で、イタリアで戦っていた23才のアーノルド・オキと22才のマホル・キノシタ、そして同じく442部隊でフランスで戦死した25才のトシアキ・ショウジであった。また開拓者の多くも亡くなっていた。カジは共同体が収容所へ移った時にはメルセド病院に残っていたが、彼の家族がアマシェに行って3ヶ月後に亡くなった。ヨウスケ・マスダも1943年にアマシェで亡くなった。ソウキチ・タケムラは弟とかわいい姪と離ればなれになり、1948年、日本で亡くなった。サトウ、ナカ、イシハラ、ブンサク・ノダ、モリウチなどの一家は共同体を出ていった。再び結成した共同体は小さく、加入は受け付けられず農場も家ももはや戦争以前のものではなかったが、1世も2世も共同体の再建を選んだのであった。

XI 共同体の再建 1946年—1960年

戦争が終ると、コロニー共同体は再び活気づいてきた。2世たちの農場経営はうまくいき、2つの協同組合は合併された。彼等の結婚や子供の誕生、町の行事や政治にも大いに参加することになった。農場へ戻って来た者も、他所で落着いた者も、1世である親にとっては誇りであった。というのは設立者の夢が遂に完全に実現されたのは2世達の努力を通してであり、また彼らの生活においてであったからに他ならなかった。

たとえ戦争が終って彼等の帰郷が困難で、肝をつぶしたとしても、リビングストーン・クレシイの開拓者のごく少数を除く大部分の人は、西海岸にいた日本人の多くが強制立ち退きと、戦後に当面した損失の問題（大多数は仕事と家を失なった）をまぬがれたのである。モンベルグの管理下にあったコロニーの農場は、借りた個人によって違っていたが、農場を失なった者はいなかった。その管理は独特のもので、効果的なものであった。今日一般にモンベルグは有能で正直な管理者であったと評価され、⁽³⁹⁾ またベシィ・オースティンの助力も大きく、彼女

は“我々の物権を守ってくれた”と多くの2世は評価する。

農場の管理が如何様であろうとも、戻れる所があったのは幸運で、さらに殆んどの人々は銀行預金を持っていた。戦争中に農場収益が伸びたため、中にはその時のお金で最初の年の生活費と農場経営費を十分に補うことができたという者もいた。またコロラドで新しく農業を始めるのに収益の大部分を使ってしまった者でさえ戦争後の物価の上昇で利益を得ていた。

2世達は2つの協同組合を統一することによって、さらに自分たちの経済的地位を固め、高めていった。戦後、カズオ・マスダが再びリビングストン果実取引所の管理者となった。1950年にシカゴで自動車修理工場を運営していたコロニーの2世のフレッド・ハシモトがマスダの後を継いだ。リビングストン果実栽培者組合（LFGA）はトヨジ・コンノが管理者としてずっと働き、バディ・イワタが1954年に雇われるまで、ノーマン・キンがコンノを助けていた。イワタはトールクで育ったがメルセド収容所に送られて、皆と一緒に暮らしていたのでよく知られていた。彼は外部の人であったが、合併することの多くの利点について熟知しており、立派にこれを証明した。1956年、2つの協同組合は独立した労働組織、リビングストン農業協同組合を設立し、ブラセロ計画（季節労働のためメキシコ人労働者が契約される連邦計画）に1つの組織として参加した。翌年、果実取引所と果実栽培者組合が正式に合併して、バディ・イワタが管理者に採用された。またこの新しい組合は、比較的小さく、非協力的な市場組織であったパシフィック果実取引所から、カリフォルニア果実取引所と提携を結んだ。今日でもこの組合はまだリビングストン農業協同組合と呼ばれている。

以前の2つの組合員同志間で分裂らしきものが数年間続いたけれども、やがて合併したことすら忘れるに至り、1つの組合として認め合うようになった。⁴⁰しかし合併後、協同組合は統一したことの利点を使ってすぐに資本の拡大を始めたのである。コロニーが設立された当時の境界内のユーカリプト アベニューに、桃を缶詰工場へ運ぶ前に品質を調べて、重さを計ることのできる出荷所を建てた。また2年後の1959年にアーモンドの殻剥工場を同じ敷地内に建てた。1958年には町の出荷工場にフォークリフトが設備されて最新化され、またその空地には冷蔵倉庫の建設が始められた。そして1959年には新しいオフィスビルが完成した。

協同組合の合併は戦後の共同体において健全でかつ統一的な重要な雰囲気をもたらした。というのはこの合併を通して長年にわたる共同体の分裂が終わったからである。また他に統一を表わす重要な基盤ができ上がっていた。日米市民連盟（JACL）が拡大したこともその例である。この団体の目的は従来通り第一に社会的であるということであったが、今迄のように年配の2世達だけではなく、共同体全体がこれに関わってきた。毎年JACL主催の「卒業生を祝う野外パーティー」が公園や海岸で開かれ、共同体の全員が、その年に中学、高校、大学を卒業した3世たちを祝うために集まった。伝統的な共同体の野外パーティーも復活され、野球、徒競走を行い、日本食やアメリカ食をかご一杯持って集まり、無料のアイスクリームやソーダを飲んだり食べたりした。1954年に市民権を獲得した多くの1世たちを祝して開かれたJACL主催のパーティーは「一世感謝祭」と呼ばれ、おいしい料理を食べ、子供達がショーをして、それぞれの1世に僅かながらの贈物をする伝統的な年中行事となっていた。

JACLが主催する行事には皆がよく参加したが、戦争が終っても共同体の生活の中心となったのは教会であった。教会の建物も新しくなり、1949年には新しくチャペルが建てられた。これにはオークランドの建築家ハチロウ・ユアサがデザインし、ジョン・グルーム（ベシィ・オースティンの兄）が建築を担当した。またこの建築では2世の男性が9グループに分かれて、水道や電気、内部の仕上げの大部分を自分達で行なった。古いコロニー会館はテニスコート近くへ移された。1世達は特にこの建物に懐かしさを感じていたが、古くて危険だという

ことで壊された。新しいチャペルは1950年1月に完成され、教会の名前もグレイス・メソヂスト教会と変わった。日曜学校の授業用の談話室もある独立した教室が1961年に作られた。

戦後、教会組織や教会活動は共同体の殆んどの人々にとって再び重要なものとなった。1世や2世、3世たちは教会に決まって仲間達と会っていた。1世の女性たちは婦人会（Fujinkai）を、2世の女性たちはキリスト者奉仕婦人会（WSCS）をそれぞれ組織した。青年団が若い方の2世たちによって組織され、昔、1世達の活躍したYMCAを思い出させた。子供達は日曜学校へ送られ、聖歌隊も作られた。

親達、祖父母達、子供達はそれぞれ分かれて活動したが、教会はまたそれぞれの世代を結びつける役割を果たした。休日は再び共同体の行事を行う日として使われ、クリスマスの催し、復活祭の卵探し、ハロウィンパーティー、母の日を祝う行事（花束が1世と2世のすべての母親に送られる）が行われた。日曜日の礼拝には共同体の殆んど総ての人が集まった。日本人地区協議会は日本語と英語の2カ国語のできる牧師を共同体に呼び寄せたので、礼拝は日本語と英語の両方で行われた。賛美歌は1世は日本語の賛美歌集を見て、2世、3世は英語の賛美歌集を見て一緒に歌った。礼拝が終ると、教会のホールや庭は礼拝用のよそ行きの服を着、仲間に会いに来た親、子供、祖父母たちで一杯になった。共同体を離れ、帰省のため家へ帰って来た2世達は教会の礼拝に出れば、昔の友達全員に会えることを知っていた。

教会での結束力は拡がって、それがもたらした社会的つながりを超えていった。必ず出席しようとも、そうでなくても、2世達が言うように、彼らは責任感や所属感を感じていた。管理人は雇っていなかった。週1回の掃除が計画的に順番に各家族によってなされた。大掃除は年に2回男性が集まって行った。2世の女性たちは当番を作って、行事計画や準備係に順番に就いた。

教会はまたコミュニケーションや現在と過去を結びつける重要な役割を果たした。週報が共同体全員と、他へ移って行った多くの人々に配られた。教会に関する情報の他にも、出産、死亡、結婚、卒業についても週報で報告された。そのような祝いや、前の年に亡くなった1世を思い出し贈られた寄附や贈り物も報告された。共同体はこのようにして過去の思い出を守り、現在においても固く結びついている。

コロニーの開拓とアメリカにおける安孫子の政治的な夢は1960年までに果たされた。ついに日本人はアメリカでの正当な権利の承認を得「同化できない外国人」としての日本人のイメージは消えた。1948年にトルーマン大統領は強制退去によって生じた損害の賠償を規定した過去損害賠償請求法案に署名した。⁽⁴¹⁾ 1952年にはウォルターマッカラン法案が可決され、同時に1世は帰化する権利を得た。そして1956年に外国人土地法は廃止された。

法律の改正によって日本人に対する態度も変ってきた。戦争のおかげで2世たちが「ゲッター」と呼んでいた戦前の共同体の状態は終わった。彼らは田舎に住んでいたが、偏見と不況のために自分達の社会の中に閉じ込められていた状態だった。戦後、共同体やまた別の所に住む2世たちは1世である親達とコーカサス系アメリカ人との断絶にかけ橋を渡した。戦前、コロニーの2世たちは町の職員として働いている日本人のことを知らなかったり（他の所では数名の日本人が働いていた）、教鞭を執っている日本人のことは知らなかったが、1946年も過ぎると、共同体から5人の男性が郵便局で職を得たり、また数名の女性が教師として、看護婦として働いた。協同組合は徐々に外人の組合員を受け入れるようになってきたり、日本人達もライオンズクラブ、ロータリークラブ、PTA、そしていろいろなスカウトグループなどで活動し始めた。2世の中には高校や小・中学校の委員会の役員に選ばれ、何年間も活躍した者もいた。

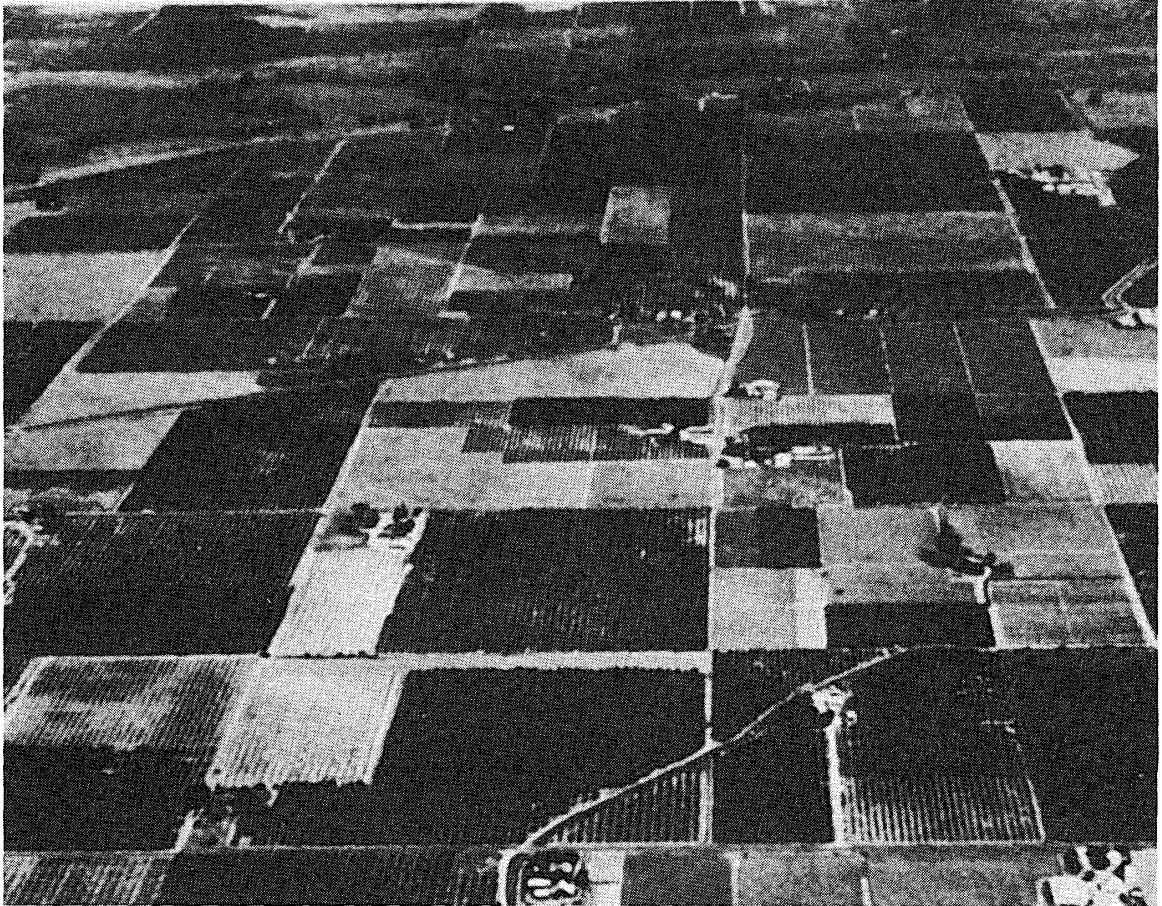
1960年までに、共同体はその設立時に掲げた目標に到達しつつあった。それは快適な生活



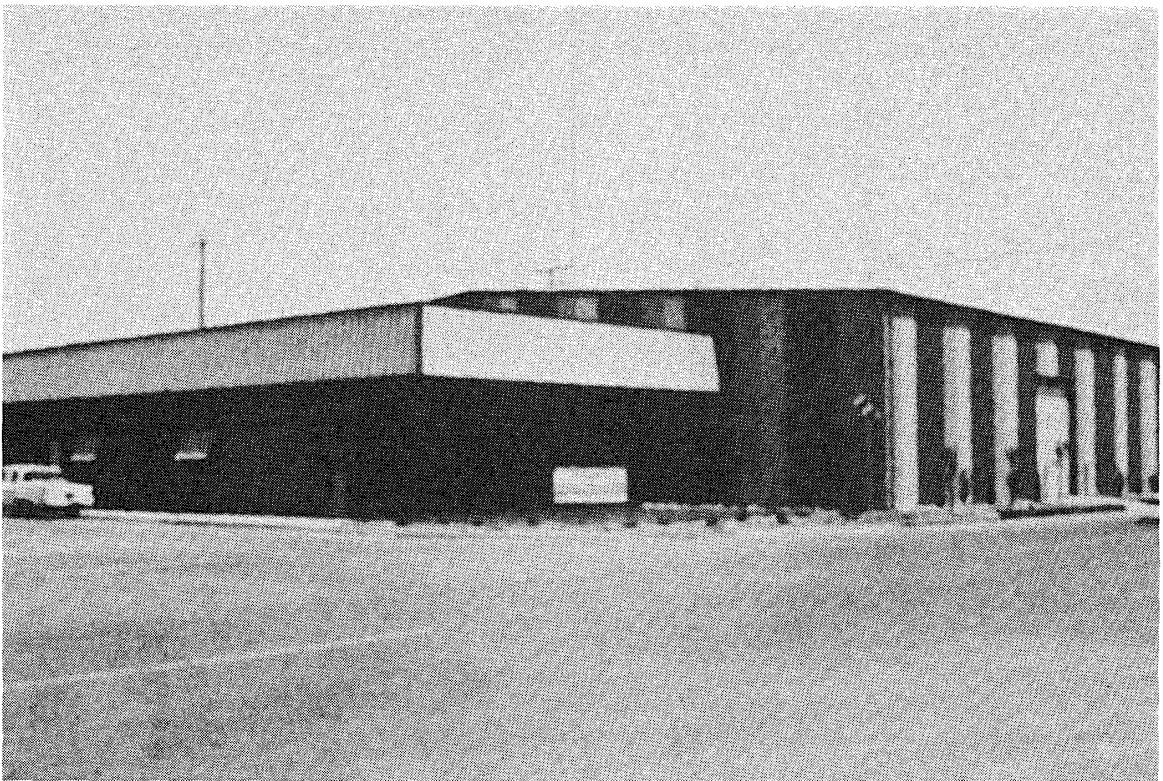
1910年代のさつまいも畑，果樹園が出来上るまでの主要現金収入源であった。現在でも相当に作付けされ出荷されている。



1919年11月リビングストンで日本人への土地売買ボイコット運動が始まり，1920年1月上記の看板が2枚町の入口の道路沿いに立てられた。5月看板は“リビングストン運命共同体”と書き替えられた。



大和コロニー——中央やや右よりがヤマトロード，右上が協同組合の施設，全面に果樹園が展開する。1980



リビングストーン農業協同組合——事務所と箱詰め作業所。1980

を送るための基盤作り——家族，そして共同体で団結し合う個人の生活——であったが，同時にアメリカに定住することを決めた日本人のアメリカでの将来に対する新しい出発点としての始まりであった。設立者のこの2つの夢は2世の生活の中で，そして彼らの活動と信念を通してとうとう成し遂げられたのであった。

あらゆる偏見にも拘わらず2世達は1世たちと同様に，アメリカでの希望を捨てようとはしなかった。仕事に就く望みが殆んどなくても大学へ行き，親たちがアマジエにいても軍隊に服役し，戦争が終って自分の家へ戻ろうとして物理的な反抗にあったにも拘わらず農場や共同体を再建した。コロニーの建設から50年以上も経つと，多くの人々はカリフォルニアを離れてアメリカ中の他の州へ散らばっていった。医者，会計士，実業家，科学者，教師，農場経営者として働いた。共同体へもどってきた者，家族経営の農園を発展させた者，果樹や花で道端を飾った者，協同組合を統一した者，家族或は友情で結ばれた者は，砂の中でみてきた夢を現実のものとした。コロニーの子供たち全員は——共同体から去っていった2世も——1世の子孫であり，アメリカで生れたアメリカ社会の一員であり，安孫子が心から望んだ日系アメリカ人となった。彼らの生活の中で，そして彼らの共同体の中で，安孫子の夢は遂に実現したのである。

註

- (1) 数ある中で，1920年のカリフォルニア外国人土地法は日本人にどの土地所有会社の株券も買うことを禁じた。1922年，サトウノブタダはある裁判問題に関わった。それは外国人土地法の有効性に異議申し立てをするものだった。サトウと相手のレイモンド・フリックはメルセド・ファーム・カンパニーの28の株券をフリックが売り，サトウが買えるよう一時差止命令を申出た。彼らの請願は1922年5月22日北部地方裁判所で却下された。フリック・サトウ事件は合衆国最高裁判所まで持ち越されたが，1923年下級裁判所の決定が支持された。
- (2) 日本人労働者はストックトン附近の農場から強制退去させられ，リビングストン駅へ連れて行かれ，2度ともどって来ないように命じられたとリビングストンクロニクルは報じている（1921年7月22日）。サンフランシスコ総領事ヤタは外務大臣ウチダの要請でその出来事を調査した。彼は日本人労働者はストックトンから雇われて来た者で，リビングストンの西約60マイル離れたいちじく農園でアメリカ人に使われて働いていると報告した。また次のように述べた。「かなり前から南ヨーロッパから渡って来た多くの下層階級移民がいるが，日本人に対する彼らの行動は我々が進出してくるのではないかという恐れからくるようである。土地の労働組合が反日本人労働者に関する決議案を通過させた直後にも日本人は低賃金で雇われていた。今のところ American Legion (米国在郷軍人会連盟) や他の反日本人組織がその活動を支持しているのかどうかわからない。しかし見たところ，リビングストン地域のアメリカ人の有力者たちは日本人には同情的で，この出来事を不愉快なことだと思っている。」（日本外務省，対外政策文書，1巻第1章，1921，pp. 267-268.
- (3) リビングストンクロニクル，1920年1月23日。
- (4) リビングストンクロニクル，1920年3月19日。
- (5) 1920年，リビングストンクロニクルによると（1920年4月16日），“この地域の日本人の代表として意見を述べている”商業委員会の年一回の夕食会にナカが出席したという。またリビングストンクロニクルはナカがマッカシーの Sacramento Bee にあてた手紙の大意と Congressional investigation committee (立法調査委員会) へ意見を述べたという証拠の写しを載せた。
- (6) E. Manchester Boddy 著，アメリカの日本人 (Japanese in America) (サンフランシスコ：R. and E. 調査会，1921年) pp. 99-102, 119.
K. K. カワカミ著，The Real Japanese Question (ニューヨーク：The MacMillan Company, 1921年) p. 51.
Winnifred Raushenbush, “Thier Place In The Sun”, Survey Graphic, LVI (1926年5月), pp. 141-145, 203.
- (7) リビングストンクロニクル，1920年11月15日。
- (8) イサジ・キリハラには1975年8月11日にインタビューした。キリハラとタケンタによると，シマ

- ノウチは安孫子の土地販売業者で、日米の取引先であった。一家は1918年にコロニーにやって来たが、数年後出て行った。
- (9) 1919年、日本人開拓者は安孫子の3番目のコロニー建設事業であるコルテーズに移り始めていたが、コルテーズ共同体は物理的(約7マイルの距離)にも社会的にもヤマトコロニーと離れていた。
 - (10) ツルダはアラメダにいちご、ミヤケはインペリアルパレーにメロン、ハンモトはリブオークに米を栽培していた。
 - (11) アキ・スズキ夫人へのインタビューは1975年6月25日のものである。
 - (12) クレシイコロニーの大多数の農家はFruit Exchange(果実取引所)の会員であった。キモト、キムラ、スズキ家のみがFruit Growers(果実栽培者組合)の会員になった。キムラとキモトはFruit Growersの会員と縁故関係であった(キムラ家はカナガワ家と、キモト家はミヤハラ家と)。スズキは初めFruit Exchangeの会員であったが、のちにGrowersの会員となった。
 - (13) ローゼンブッシュ(“Their Place In The Sun”の著者)によると、リビングストーン銀行の株の20%を日本人が持っていたという。銀行が閉鎖された時、持株は1株100ドルと査定された。
 - (14) ベシー・オースチンが協同組合で働き始めた1921年、組合は先ず、ホワイトマラガとトーケーを手がけた。アンドウによると、1920年代、コロニーの農園はマラガからトンプソンへと変わっていった。トンプソンはワイン、デザート、レーズンというように数種類に分けて市場で売られるので利益があった。
 - (15) ある一定の年の利益は一般に直接経営者には戻らなかったが、何年か先、回転資本として利用するため組合に預けていた。
 - (16) 本文に註記がないのでよく解らないが、Ceres Manとなっているから、南アフリカ連邦のプロビンス地方のことではないかと推測するが、カリフォルニアとニューヨークにも同一の地名がある。なおアルゼンチン、ブラジル、スコットランド、イタリアにも同名がある。本来はローマ神話のみのりの女神である。(訳者註)
 - (17) これらの日付はベシー・オースチンとカズオ・マスダによるもので、おおよその日付である。
 - (18) 日本学校の先生の中にはオキ夫人、N・タンジ夫人、K・タンジ夫人、オクエ夫人、マス・オオクボ、リチャード・オクダ、ケンジ・ミナベ、ハヤネ・カナガワ、そして牧師やその夫人たちがいた。C・オクエ夫人は次のように言っている。“子供たちは全々興味を示さなかった。別な本を使うべきだった。他のところのように子供たちがまだ小さい時に始めていたなら、うまくいっただろう。6年生や中学生にもなっているのにまだ小学校1年生の教科書を教えていたのだから。”
 - (19) WCTU(女子キリスト教禁酒同盟)1919年~1933年アメリカ合衆国禁酒法成立にもなって、一番強力な推進団体となった。(訳者註)
 - (20) 1938年、リビングストーン高校の全生徒数の約22%がリビングストーン、クレシイ、コルテーズの日本人で占められていた。
 - (21) ヘンリー・カシワセ、デビッド・キリハラ、マモル・マスダ、ボブ・モリモトは戦争前に徴兵されていた。
 - (22) メアリー・カップルズ・ピックフォードが1965年フレッド・キン、ジェイク・キリハラのインタビューを録音した。
 - (23) 例：ブンサク・ノダ、モリウチ、ハンモトは土地の管理者、監督者としてカーペンターを選んだ。アンドウはジョン・グルーム(ベシー・オースチンの兄)に農場を管理してもらい、マサゾウ・キンは学校の農業の先生であるコーリスターに任せた。
 - (24) 農場経営者や管理者たちが署名した契約書には5人の顧問が上げられているが(ブラウン p. 194)、戦時中のコルテーズ Growers Associationの管理者であるサム・クワハラによると、3人しかおらず、それぞれの組合が管理者を選んだという(コルテーズ Growers はグリズワールド、Fruit Growers はマクローリン、Fruit Exchange はリッチを選んだ)。また、それぞれ組合は管理者を助けるため土地の人をつけた(コルテーズはバッチ、Fruit Growers は C. L. ストリンガー、Fruit Exchange はジョー・ウォルフをつけた)。
 - (25) マサヲ・ホンノ、個人の記録では368回署名
 - (26) ジェイク・キリハラ (Pickford: 1965)
 - (27) ジェイク・キリハラ (Pickford: 1965)
 - (28) 集会では規則を成文化したが、ただそれだけで終わってしまった。日本人がアマシェへ出発する寸

前に、“自治組織”を禁止する W C C A の指令で集会は解散となった。代表者は正式に辞任したが、毎日責任者と会っていた。

(29) ジェイク・キリハラ (Pickford: 1965)

(30) ジェイク・キリハラ (Pickford: 1965)

白井昇：カリフォルニア日系人強制収容所 河出書房新社 1981. pp. 69-72 にツールレーキ収容所でのプライバシーと材木略奪騒動の話が出ている。共通した問題がどこの収容所でもおきたことを物語っている。(訳者註)

(31) カズオ・タカハシ, 1975年6月12日

(32) ベティ・フランシーズ・ブラウン, あるカリフォルニア農業共同体における日本人の人口減少(修士論文, 未発表, スタンフォード大学教育学部, 1944) p. 183.

(33) フレッド・キンがマサオ・ホシノに宛てた手紙, 1944年10月22日。

(34) リビングストンクロニクル, 1944年12月21日。

(35) コルテーズ・リビングストン果実取引所の最後の総会の議事録, 1945年1月17日。

(36) アンドウ家で起った3番目の攻撃とコルテーズ教会への最初の攻撃は, 1945年4月5日のリビングストンクロニクルで報じられた。キン家とマツモト家の発砲事件は1945年4月22日に起った。

(37) メルセド・サン・スター, 1945年5月1日 pp. 1, 3 以下の公聴会についての記事はこのサン・スターの報道による。

(38) サイ夫人は次のように記した。“彼ら(日本人)は正当化され、憲法で定められたあらゆる権利によってここに住む。それ故立派なアメリカ人である。それともここにはいけないのであろうか。攻撃するのを止めましょう……。”(リビングストンクロニクル, 1945年4月26日)

(39) 農場の管理について不満を示す者もいたが、ベシー・オースチン、カズオ・マサダ、サム・クワハラ(戦前、戦後のコルテーズ Growers の管理者)はモンベルグ個人に対して何の非難もしなかった。反日感情、不当利得、部品不足のため機械を直すことができないなど戦時中において、モンベルグは出来るだけのことをしたとして評価した。

(40) 農場経営者間に残っていたただ1つの分裂はベシー・オースチンと果実取引所の前組合員との特別な関係のためであった。オースチン夫人が1953年引退した後、取引所に加盟していた L F A の組合員は毎年彼女にわずかの年金を送っていた。また、年に一度彼女の家の庭の掃除をするため彼女の所に集まり、パーティーを開いた。オースチン夫人は毎年、記念日や祝日にカードを送ってお礼をした。また、子供が生れると、わずかな貯蓄債券を送ったり、毎年誕生日にはカードや、また時には現金を送ったりしていた。ある3世はアフリカのピース・コープスで軍隊に勤務していた時、バースデーカードが送られてきたのを覚えているという。また、ベシー・オースチンは僕のことを絶対に忘れないで、アフリカにいる時でさえも毎年カードを送ってくれたと語った。

(41) Evacuation Claims Act は政府に強制退去の不当性を認識させる手段であったが、リビングストンやクレシイの日本人は自分たちの損害に対してほとんど弁済されなかった。モンベルグの保管は農場は守ったが、実際の収益は、経営者が作物を作っていたなら当然得たであろう収益よりはかなり低いものであった。一般に農場保管者やその家族がする仕事には賃金を払わなければならなかった。値上りした肥料や必需品を平気で買うなどして経費は時々必要以上にかかった。モンベルグの保管にも多くの経費がかかった。農場経営者は農場保管の諸経費や、モンベルグの給料、手数料(総利益の1%、純益の3%)を支払った。さらにそれぞれ保管者は自分たちの管理下にあった農場から総利益の1%を受け取った。収入の大部分は農場の借人に支払った。しかし、政府は損失として全ったくモンベルグの運営にかかった経費を認めなかった。

追 加

そのⅠ. ある一人のコロニーへの道程

“日本では一旗上げるチャンスはなかった。アメリカではこういうチャンスが誰にでもあるという訳でもないが、日本ではせいぜい警察官か高校の先生ぐらいしかなれなかつただろう。おそらく中学校の校長ぐらいがいいとこだらう。家族を養うにはこと足りただらうが、子供たちに教育を受けさせることは、出来たかどうかちょっとわからない。私は8年間学校

へ行ったが、4年間は義務教育だった。それが精一杯だった。”

テイイチ・アンドウ氏は1883年岐阜で生れるとすぐに名古屋のアンドウ家で育てられた。彼がコロニーへ来たのは1910年7月16日である。筆者がこの本の調査に取りかかる時点で、共同体へやって来た開拓者の中で、この年以前の人は、アンドウを除いて皆亡くなっていた。本書の資料の多くは彼の記憶に基づいている。彼の話はここでは窓口となっている。これを通してアンドウと既でに亡くなっている人達（ここに登場する人達はアンドウと同じく決意の固い者達であった）を辿ってみる。これはアンドウ氏のコロニーへの道程である。

アンドウは15才の時、海軍に入隊し、士官学校へ入る資格試験を受けるつもりでいた。彼は士官学校をさらに教育が受けられる場と考えていたが、不幸にも規則の改定で資格試験を受けられなくなったが、代わりに5年後、下士官の試験に合格した。海軍での訓練の間、クラリネットを教えられ、後に楽隊に入ることになった。アジア、南太平洋、オーストラリアを回り夜は將軍のためにダンス音楽を演奏し、日中は英語や数学の勉強をした。

19才になると、アンドウは京都近郊の教会で洗礼を受けた。初め、キリスト教については否定的であり、経験から宗教について具体的な批判を固めるつもりで信者の友達の招待で初めて礼拝に参加したが、代わりに影響を受けてしまった。

入隊して11年でアンドウは海軍を退役し、アメリカ行きのパスポートの申請をした。というのは、アメリカで農業を始める決心をしていたからである。紳士協定を掲げて、日本政府はすでにパスポートの発行を控えていた。彼の申し込みは受け入れられなかった。アンドウは国外から申請をしたならパスポートが手に入やすいと思ったので、すぐに中国の天津に向かったが、またもや申請は受け入れられなかった。しかし、必要な書類と、ロンドン万国博覧会で日本パビリオンを建てる大工の通訳の仕事を見つけ、1910年11月27日、イギリスへ向かうことができた。通訳の仕事は好きではなかったが、ロンドンで1ヶ月仕事をした後、ニューヨークへ立った。到着するとすぐにパスポートの提示を求められたが、盗まれたふりをした。「トラंकの中に入ってたんだが、盗まれた。」その時はわざわざ探さなくてもよいと言われ、追いやられた。

ニューヨークではベル・テール（美しい大地）と呼ばれるサマーエステイトで働いた。

1910年7月4日（アメリカ合衆国独立記念日）が過ぎるとすぐに、アンドウは汽車に乗ってカリフォルニアに向かった。リビングストンへ行くつもりであった。牧師からセイノスケ・オクエへ宛てた紹介状を預かっていた。

リビングストンには午後2時に着いたが、到着時間のことを知らせていなかったのも、誰も駅に出迎えに来ていなかった。アンドウが最初に会った人はヤマトの兄であったが、あまり日焼けがひどかったのも、ヤマトがメキシコ人か日本人なのか解らなかった。アンドウは日本語で話しかけ、その人やそばにいた日焼けした人達が日本人であることが解った。皆はアンドウをオクエの家へ案内したが、アンドウが暑さのため途中でぐったりしたので、タジロウ・キシの家へ立ち寄った。結局は町に郵便物を取りに行き、農場へ帰る途中の人の車に便乗させてもらった。

アンドウは1910年から1918年までオクエの農場で働いたが、そこにいる間中ほとんど主任級であった。1915年、結婚するため一時日本へ帰った。4年後、クレシイ近くの酪農農園を買い、妻と一緒にそこに移り、農場をベル・テール（美しい大地）と名付けた。

そのⅡ．コロニーの行事と訪問者（リビングストンクロニクルから）

1915年9月25日：ダンジョウ・エビナ牧師が町のメソジスト教会で説教を行なった。教会

は満員だった。編集者は次のように述べている。“先週の日曜の夕方に、ダンジョウ・エビナ牧師の話を聞きに集まった人達は、娯楽という観点ではなく、知的な恩恵という点ではめったにないもてなしを受けなかったのでは……”（エビナ牧師は7年前、コロニーと町を訪づれていた。）

1915年10月29日：訪づれた日本の新聞記者のため晩餐会が町のアイダー・ハ・ホテルで開かれた。12名のリビングストンのアメリカ人と数名のヤマトコロニーの日本人が出席した。N・サトウが司会をつとめ、医者ガイ、H.P. スペンサー（リビングストン第1銀行頭取）、M. ランドラム（商工会議所の事務官）、R.A. ヒル教授、E.G. アダムス、ラルフ・シャフィー牧師（メソジスト教会）がスピーチを行なった。M・ミナベはコロニーの現況を次のように述べた。“皆さんが話しをされていて思うことは、晩餐会に出席している2人種間のよりよい理解と、ここの日本人の業績を称讃していることである。”

1916年1月7日：過去2年間、リビングストンでは女の子より男の子のほうが多く生れた。アダムズは“サンダーズ先生は思い出せないでいるが、生れた男の子にある夫婦が英語の名前をつけたがっていたので、先生が12の名前をあげて、その中からリチャードを選んだ日本人の夫婦”を含めて男の子のいる家庭を書いている。（おそらくこの子はサタロウ・オクダの子であろう。）

1916年9月10日：M・ミナベが最新大型オープンカー・サクソン6に乗ってストックトンから帰って来た。（アンドウはこの車はコロニーで初めて買った車だろうと思っている）

Selected Bibliography

Abiko and His Enterprises

Abiko, Kyutaro. *A Reply to V. S. McClatchy, with Prospectus of a Friendship Campaign*. Japanese American Bulletin Number One; San Francisco: *The Japanese American News*, 1924.

Abiko, Yasuo. A biography of his father, Kyutaro Abiko. Department of Special Collections, University Research Library. University of California, Los Angeles.

Cross, Ira Brown. *Financing an Empire; History of Banking in California*, Vol. II. Indianapolis: S. J. Clarke Publishing Co., 1927.

Nichibei. September 5, 1942.

Park, Robert Ezra. *The Immigrant Press and Its Control*. "Americanization Studies"; New York; Harper & Brothers, 1922.

The Shigeki Oka Papers.

Nisida, Kazuo Kay, "Kyutaro Abiko: Pioneer." Oka, Shigeki, "Forward." Okina, Kyuin. "Abiko Kyutaro to Watakushi." Yamano, Masataro, "Mr. Abiko, My Esteemed Senior." Yamamura, Shiro, "Reminiscences of Mr. Kyutaro Abiko." Japanese American Research Project Collection. Department of Special Collections. University of California, Los Angeles.

Interviews

Masuda, Kazuo. Interviews: 1970—1974. Tapes.

Parker, Carlyle. Interview of Mr. Hugh Griswold. January 25, 1975. Tape. Stanislaus State College Library.

Pickford, Mary. Interview of Mr. Fred Kishi and Mr. Jake Kiriwara. 1965. Tape.

Takarabe, Heihachiro. Interview of Mrs. Kazuko (Minejima) Hayashi. *Issei Oral History Project Inc.* December, 1971. Transcript.

Settlers: Biographical Materials

The History of Sycamore Congregational Church, 1904—1974. El Cerrito, California. By the Sycamore Congregational Church, 1974.

Correspondence, personal conversations, and interviews with community *Issei*, *Nisei*, and related outsiders, by the author. Questionnaires distributed by the author.

Japanese Who's Who in America. San Francisco. *Japanes American News*, 1922.

Livingston Church of Christ. Records, 1917—1970.

The Colony

Brown, Betty Frances. "The Evacuation of the Japanese Population from a California Agricultural Community." Unpublished Master's dissertation, School of Education, Stanford University, 1944.

Contributions of Japanese Farmers to California: Excerpts from the San Francisco Chronicle, Annual Edition, 1918. San Francisco: 1918.

Farm Company incorporation papers, from the California State Archives.

Harrington, Lydia B. A. "Train Children in Americanism," *San Francisco Chronicle, Western Expansion Edition*, (January 14, 1920), p. 47.

Livingston Chronicle. 1913—1967.

"Livingston "Y" Works Towards Americanization," (By a Member), *San Francisco Chronicle, Western Expansion Edition*, (January 14, 1920), p. 47.

Minejima, Giichi, "Yamato Coroni no Yurai," *Hokubei Noho.* I:7, September 1, 1910.

Merced Sunstar. January 29, 1945; April 24, 1945; May 1, 1945.

Okuye, Seinosuke. Diary Excerpts, 1907—1922. Translated by Mrs. Chiyo Okuye.

Rausenbush, Winifred. "Their Place in the Sun: Japanese Farmers Nine Years After the Land Laws." *Survey Graphic*, LVI (May 1926), pp. 141-145, 203.

Shakuma. (Bunzo Washizu). "Rekishi Inmetsu no Tan," No. 94, No. 96, *Nichibei*, 1922.

編者あとがき

解題において、前半部の第6章までは、大和コロニーが創立された1904年から、経済不況直前の1919年までの安定してきた時点までの話で、原著に若干重複があったので、これを簡約化して抄訳としたことをおことわりしておいた。後半部1920年～1960年の40年間は激変の時代で、果樹栽培が軌道に乗った時点での死活問題としての第1次世界大戦後の世界恐慌—経済不況にゆれ動くコロニーの内面と、階層分化に伴う大土地所有者と小土地所有者による組合の分裂、コロニー社会内部での対立を経て、2世の活躍する時代を迎えるが、それも長くは続かず、国際間の危機・破壊へと傾斜する日本と、第2次大戦によって敵国人となった在米日本人の収容所送り、その間の2世の働き—アメリカ軍人としての従軍と若干名の戦死といういたましい苦悩の時代を迎える。

この時代の和コロニーの最も特長的な点は、カリフォルニアの大部分の1世2世達が土地も住いも戦争を契機に失ってしまったのに対して、非常に合法的にある種の賃貸しに成功して戦争を切りぬけ、開拓地へ帰郷し得た点にある。また収容所においても様々な困難さに遭遇したにも拘らず、比較的早い時期に2世達が従軍以外にも収容所から出て、仕事なり学業なりを続け得たという点にある。以上の2点において、他の移民集団とは異なる展開を示した。そこで第7章から終章までは、ほぼ完訳に近い形で、註記も大部分原著通りとし、訳者註は最小限に止めた。資料等のAppendixが41頁あるので、その中から参考になるもの2編を追加とした。写真は数あるうちから4点を選んだので御了承願いたい。なお芸林民夫教授に多くの御助言をいただいたので謝意を表したい。いづれ大和コロニーやコルテーズでの調査結果について稿を改めたいと考えている。

(1985. 7. 1)